



能舞台を模したその木造の建造物は、海に浮かんでいるというよりも、黒い泥と無数の亡者の怨念によって海底から支えられているかのようなようだった。

舞台の四隅には古い漁網と髪の毛で編まれた注連縄が張られ、亀甲の紋様が刻まれた床板の隙間からは、絶えず腐った潮が湧き出している。

そして舞台の奥には、遺跡を思わせる巨大で狂気的な石造物が、空を圧するように聳え立っていた。

葦舟が舞台の縁にコツリと当たり、遥は力のない足取りで舞台の中央へと導かれた。

息は荒く、心臓は早鐘のように鳴っている。

月彦たちの声を聞いて現世への未練を取り戻しかけたものの、彼女の身体は儀式の呪縛によって金縛りにあったように重く、逃げ出すことは叶わない。

D-3のエラー音にも似た電子音と、魚市場の競り声、そして讃美歌の音階が狂ったように混じり合う、悍ましい祝詞が空間に響き渡った。

それが、儀式開始の合図だった。

舞台の周囲に鎮座していた無数の堕子たちが、一斉に立ち上がった。

巨大な老いた赤ん坊の姿。全身のたるんだ皺には海水の塩が白くこびりつき、巨大な眼球はまばたき一つせず遥の身体をねっとりと舐め回している。

『潮が合うた』

『名が薄れた』

『器の戸口を開けい』

逃げ場を塞ぐ絶対的な包囲網を敷きながら、堕子たちが遥へと群がり寄る。

「…ッ。」

遥の拒絶の悲鳴は、彼らにとっては声の通りを良くするための歓喜の合図に過ぎなかった。

泥と粘液に塗れた青白い手が、遥の肩を掴む。

下品な音と共に、遥の着ていた黒基調のオフショルダートップスが容赦なく引き裂かれた。

「っ!？」

彼女の細く白い肩と、未成熟ながらも柔らかな胸の谷間が、冷たい異界の空気に晒される。

彼らの目的は生殖。つまり、母体となる器の蹂躪。

太く肥大した指が、遥のショートパンツのベルト飾りに掛けられ、強引に引き剥がされる。抵抗する腕は別の数本の腕に捻り上げられ、黒タイツごと下着が無惨に引き裂かれた。

白い磁器のような遥の全裸が、死肉色の赤い月光の下に暴かれた。

「…!!!」

堕子たちは慈悲など持たない。彼らの股間からは、フジツボや貝殻の突起がびっしりと生えた、どす黒く脈打つ巨大な触手状の陰茎が、涎のような粘液を滴らせながら伸び上がっていた。

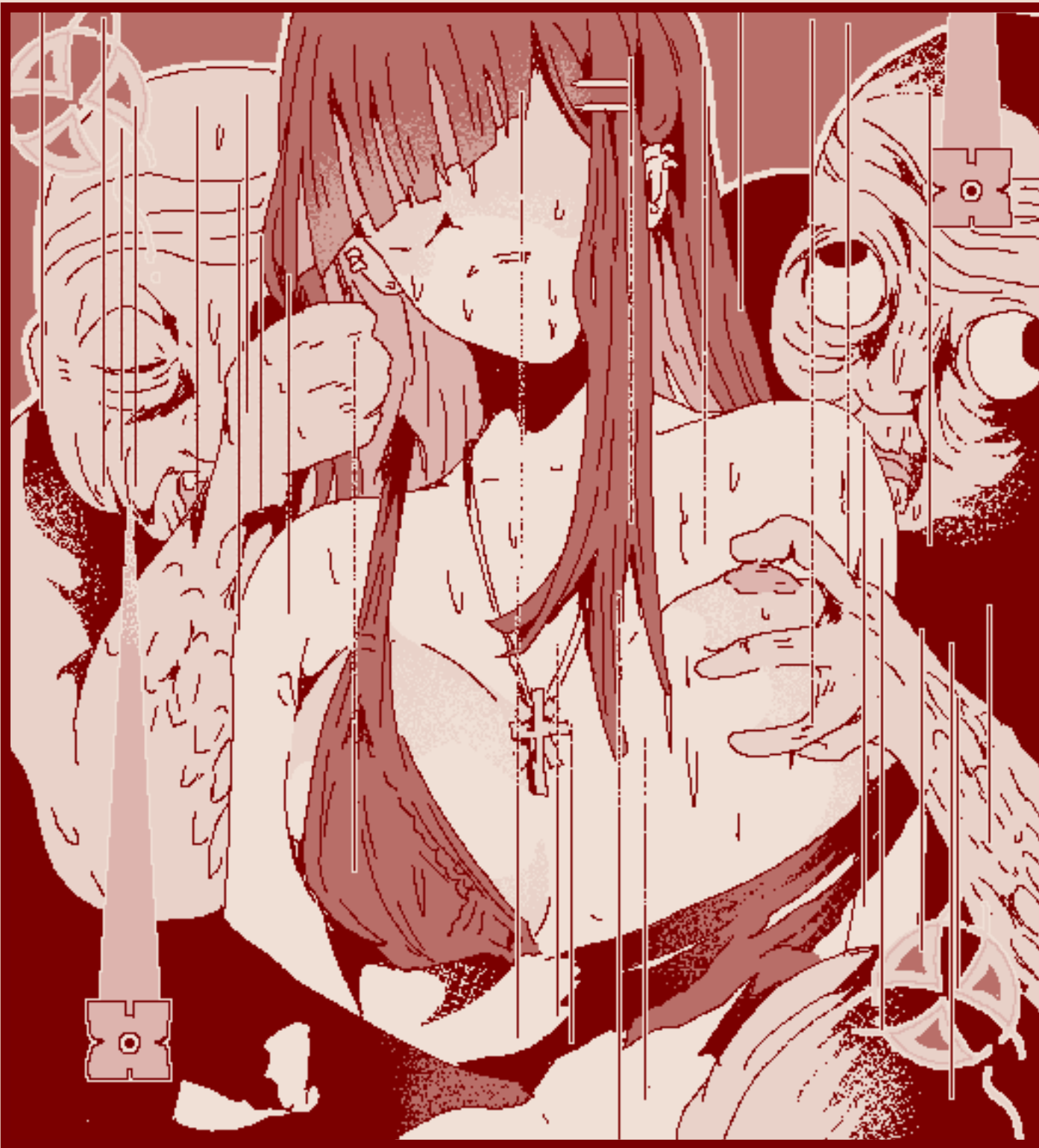
乙女の身体が、ただ産むための肉壺としてのみ扱われ、四肢を無理矢理に広げられる。

ざらついた肥大した舌が、遥の露わになった乳房を舐め上げ、先端を容赦なく噛み吸う。

「ひいっ…! あ、いやぁっ……!」

痛覚と同時に強制的に引き起こされる神経のスパーク。下腹部に押し当てられた巨大な肉の棒が、処女の秘所をこじ開けようと、ずるりとその亀頭を押し付けた。

遥の青い瞳から、絶望の涙がとめどなく溢れ出した。



遥の細く白い四肢は、冷たくぬめった亀甲紋の床板の上に無惨に礫にされていた。それは、もはや暴力と呼ぶことすら生ぬるい、尊厳の蹂躪であった。

遥を取り囲むのは、巨大な「老いた赤ん坊」たち。生後間もない乳児の輪郭を持ちながら、その皮膚は老婆のように幾重にもたるみ、海水を吸ってふやけた和紙のように青白く変色している。まばたきを忘れた巨大な眼球が、魚のように左右別々の方向へぎょろりと動き、遥の全裸の肢体を、ただの「産むための肉壺」「現世へ這い出るための戸口」としてのみ品定めしていた。

『ええ器や』

『波の癖が、よう染みとる』

しわがれた老人のような、それでいて赤ん坊の泣き声を切り刻んで繋ぎ合わせたような悍ましいノイズが、頭上から降り注ぐ。

泥と粘液に塗れた太く短い腕が、遥の豊かな乳房を鷲掴みにした。慈しみなど微塵もない。それは泥団子を捏ねるかのような、あるいは家畜の肉付きを確かめるような、無慈悲で乱暴な手つきだった。

「あぁっ…！っ…っ…！」

遥が喉を引き攣らせて身を振るが、その抵抗すらも彼らにとっては声の通りを良くするための儀式の一部でしかなかった。

別の腕が遥の黒髪を無造作に掴み、強引に頭を後ろへ引き仰け反らせる。頭皮が剥がれるような痛みに、遥の口が声にならない悲鳴の形に開かれた。

その無防備に晒された白い首筋から胸元へ、表面が紙やすりのようにざらついた肥大した舌が、どろりとした生唾を撒き散らしながら這い回る。

「ひっ…！ ううっ、あああぁっ…！」

柔らかな乳首が容赦なく噛み吸われ、引っ張られる。痛覚と、それを無理矢理に異形の媚薬成分が、遥の理性を白く濁らせていく。

彼らの股間からは、フジツボや細かい貝殻がびっしりと寄生した、どす黒く鬱血した巨大な触手状の陰茎が、みみずのようにうねりながら粘液を滴らせていた。それが遥の太腿の内側を這い上がり、最も無防備な秘所の入り口へと擦り付けられる。

人間としての意思、誇り高さ少女としての自尊心が、圧倒的な生理的嫌悪と強制的な快楽のノイズによってドロドロに溶かされていく。

自分がただの穴へと貶められていく絶望。逃げ場のない肉体的な苦痛と屈辱の連鎖の中で、遥の意識は次第に現実の輪郭を保てなくなっていった。

視界が明滅し、堕子たちの生臭い息遣いも、波の音も、遠くへ遠くへと退行していく。遥の精神は、自らの内に穿たれた深く暗い喪失の海へと、泥のように沈んでいった。



—タスケテ。

ふいに、耳元で掠れた声をした。

その声を聞いた瞬間、遥の意識は、生温かい泥の底から唐突に引き上げられた。

目を開けると、そこは先ほどまでの陰惨な儀式場ではなかった。

頬を打つのは、肌を焦がすような熱風。鼻腔を突くのは、腐った海藻の臭いではなく、ガソリンが燃える強烈な化学臭と、焦げたゴムの臭い。

「…お父さん？お母さん…？」

遥が振り返った先には、真っ赤に燃え盛る炎の壁があった。

夜の海。岸壁から転落し、半分海水に沈みながらも猛烈な炎を上げている一台の乗用車。

それは、遥が経験しなかったはずの、しかし彼女の脳裏に呪いのように焼き付いている、両親が命を落としたあの凄惨な事故現場そのものだった。

燃え盛る炎を背にして、二つの人影が立っていた。

炎の熱を全く受けていないかのように青白く、輪郭のぼやけた両親の姿。

「お父さん！お母さんッ！」

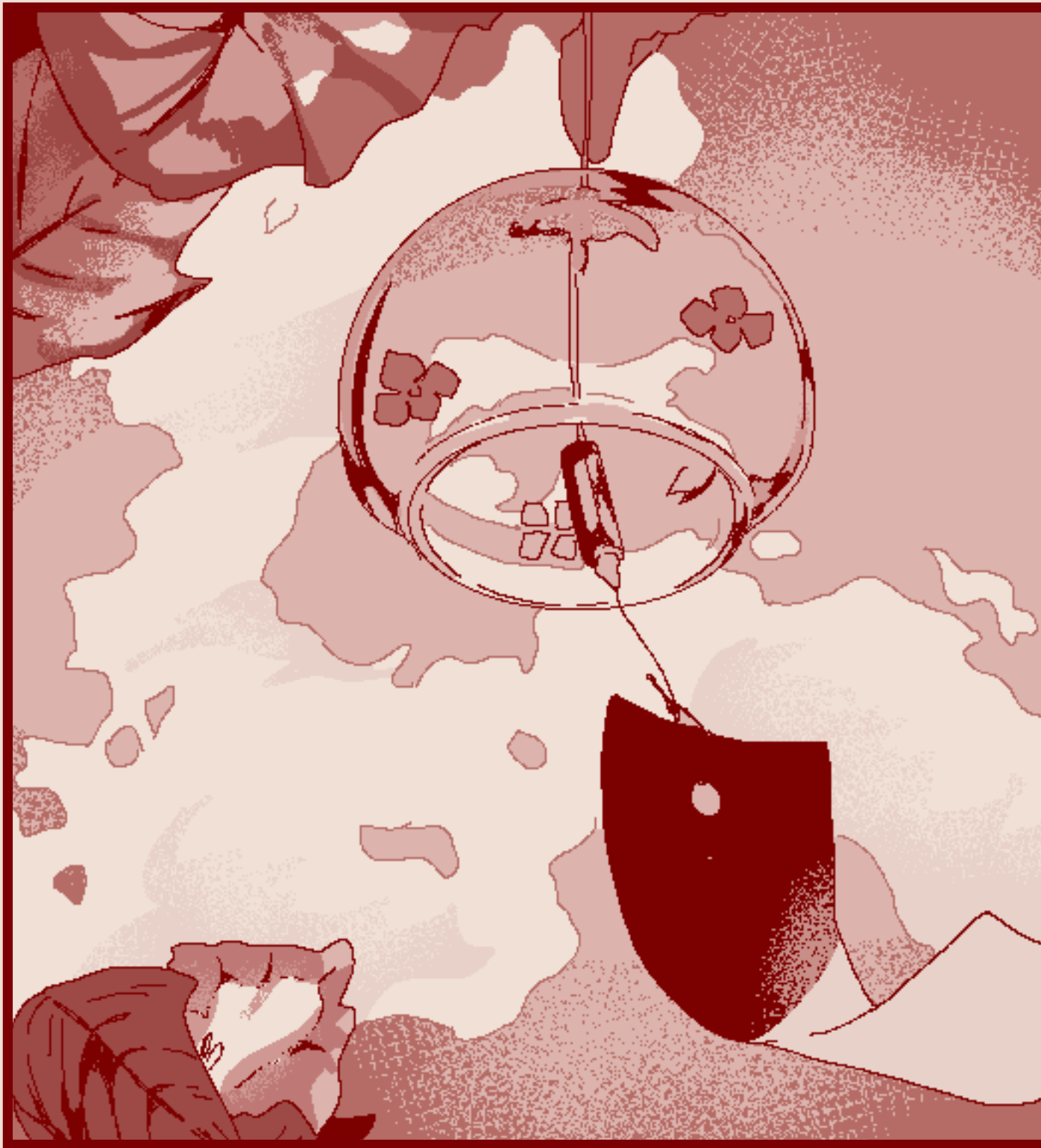
遥は泣き叫びながら、炎と波が交錯する岸壁へと駆け出した。

手を伸ばせば届く。今度こそ、自分もその手にしがみつことができる。自分だけが取り残される運命を、書き換えることができる。

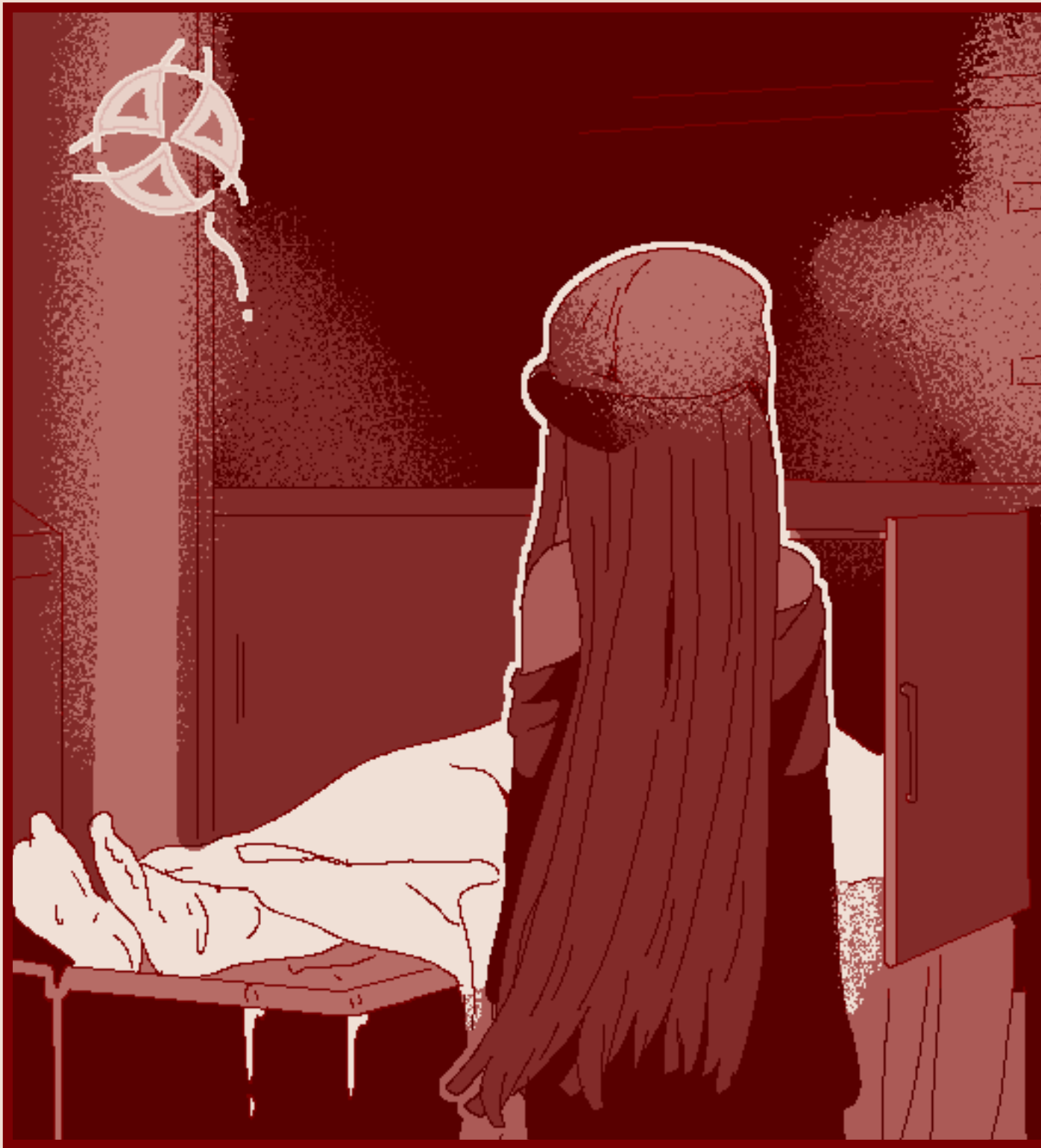
だが、遥が足を踏み出すたびに、両親の姿は蜃気楼のように揺らぎ、まるで足裏が地面から浮いているかのように後退していく。

「待って！置いていかんといて！」

遥の悲痛な叫びを無視するように、幽霊となった両親は、背を向けたまま暗い夜の海を滑るように遠ざかっていった。



気がつけば、足の裏には焼けつくようなアスファルトの熱があった。
どこかの軒先で揺れる、透明なガラスの風鈴の音が、鼓膜を優しく打つ。
空は突き抜けるような青。耳鳴りのような蝉時雨。蚊取り線香と、干物の匂い。
そこは、遥が幼い頃に見ていた、美しい思い出の王港町の夏の風景だった。
遥の視線も、いつの間にか幼い子供の高さへと下がっている。
路地の先を、見覚えのある二つの背中が歩いていた。
買い物袋を下げた母親と、少し前を歩く父親。
「お母さん！お父さん！」
遥は短い足を懸命に動かして、二人を追いかけた。
待って。お願いだから、振り向いて。ウチも一緒に連れてって。
けれど、二人は一度も振り返らない。夏の強烈な日差しが落とす濃い影の中を、
無言のまま歩き続ける。
眩しい日差しが濃く生物の腐臭に近い臭いを漂わせる。
やがて二人は、見慣れた古い平屋―遥の生家―の玄関先へと辿り着き、その薄暗い奥へと吸い込まれていった。
「待って！」
遥は息を切らしながら生家に駆け込み、重い木枠の引き戸に手を掛けた。
乾いた音を立てて、戸が開く。
その先に待っているのは、出汁の匂いがする台所と、扇風機の回る居間のはずだった。



しかし、開かれた空間に、夏の温度は存在しなかった。
頬を撫でたのは、ホルマリンの冷たく鋭い薬品臭と、骨の髄まで凍りつくような冷氣だった。
無機質で重たい冷蔵設備の稼働音だけが空間を支配している。
窓一つない、無機質なコンクリートの壁。
部屋の中央に置かれた、冷たいステンレス製の二つの寝台。
そこは、警察署の地下にある死体安置所だった。
寝台の上には、白いシーツが被せられた二つの人型の膨らみがある。
遥の足が、恐怖で縫い止められたように動かなくなる。それでも、見えない糸に引かれるように、彼女はゆっくりと、ゆっくりと寝台へと近づいていった。
指先が震える。白いシーツの端を掴み、そっと引き下げた。
そこにあったのは、青ざめ、目を固く閉じた両親の顔だった。
「…ああ…ああ…っ。」
遥の口から、絶望の嗚咽が漏れた。
その時。
死体であるはずの両親の、紫に沈んだ唇が、わずかに動いた。
『…来て、くれたんやね…遥…。』
声帯を使わない、空気が漏れるような音が、遥の脳髓を直接引っ掻いた。
『でも…遅かったわ…。ウチら、死んでしもたんよ…。』
『冷たかった…熱かった…苦しかった…。なあ、遥…なんでやと思う？』
閉じたままの瞼から、赤黒い水がタラリと流れ落ちる。
『なんで、ウチらだけが死ななアカンかったんや…？』
『なんで、お前だけが…涼しくて温かい場所で、息をしとるんや…？』
「ちが…違う、ウチは…！」
遥の呼吸が浅く、異常な速さで繰り返される。過呼吸だった。
罪悪感が、物理的な刃となって彼女の心臓を滅多刺しにする。両親の呪詛は、遥自身が何千回、何万回と自分自身に問い続けてきた、自罰の言葉そのものだった。



ひゅっ、と息を吸い込んだ瞬間、凍りつくような安置所の冷氣は、唐突に焼け焦げるような熱波へと反転した。

ざばり、と重い波の音がする。

気がつけば、遥は夜の海辺に広がる、黒ずんだ砂浜の上にうずくまっていた。

すぐ隣では、あの事故車がごうごうと炎を上げて燃え狂っている。熱気が肌を焼き、火の粉が舞い散る。

そして、燃える車の反対側、波打ち際のギリギリのところに、両親が立っていた。

炎の明かりに照らされた二人の姿は、あのノスタルジックな王港町を歩いていた時と同じ、生前の優しい輪郭を保っているように見えた。

遥は砂に両手をつき、這いつくばるようにして二人の足元へとすがりついた。

「お父さん…お母さん…ごめんなさい…っ。」

砂に額を擦りつけ、遥は狂ったように謝罪の言葉を紡いだ。

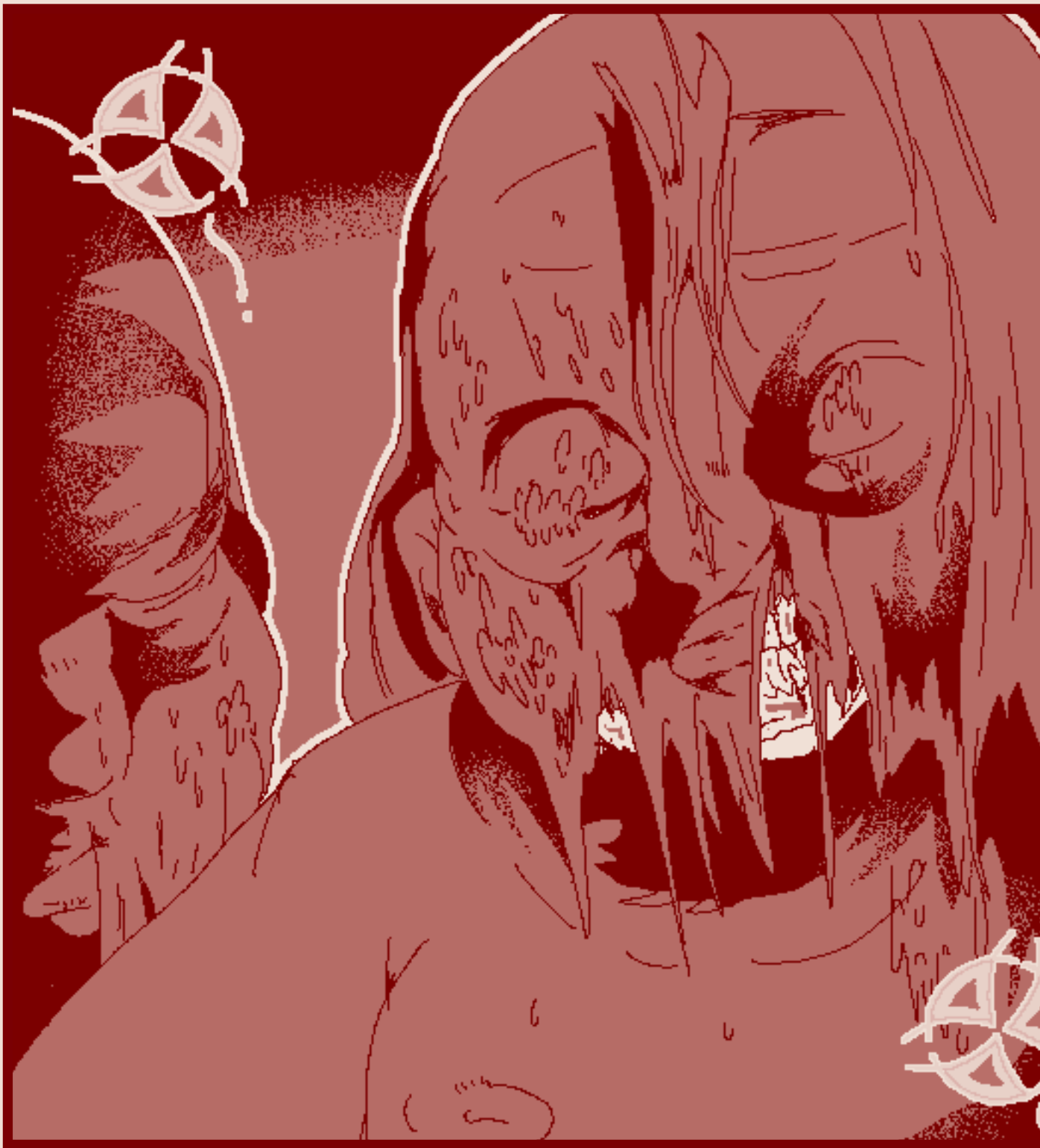
「ウチだけ生き残って…ほんまにごめんなさい…っ！ あの日、一緒に車に乗っとったら…ウチも一緒に死ねたのに…っ！」

自分が生きていることそのものが罪なのだ。

この命は、両親を犠牲にして得た、不当な盗品なのだ。

「許して…どうか、ウチを許して…」

遥は涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにしながら、赦しを乞うように、すがるような思いでゆっくりと顔を上げた。



だが、見上げた先にいたのは、優しく微笑む両親などではなかった。
「…あ、…あ？」

遥の喉が、恐怖で完全に引き攣った。

目の前に立つ二つの肉塊は、人間の形を辛うじて保った、醜悪極まりない巨大な水風船へと変貌していた。

海水と腐敗ガスによって極限まで膨張した皮膚は、土気色とドス黒い紫が混ざり合った毒々しい色に変色し、今にも破裂しそうに張り詰めている。

服ははち切れんばかりにパツパツになり、皮膚の表面は長時間水に浸かったことでぶよぶよにふやけ、所々が濡れた和紙が剥がれるようにズルリと崩れ落ち、その下からどす黒い赤身と黄色い脂肪が覗いていた。

顔は、もはや生前の面影を微塵も残していない。

眼球は腐敗ガスに押し出されて眼窩から飛び出し消え失せ、白濁したゼリーのようドロドロに溶け崩れている。

その空っぽになった黒い眼窩の奥からは、無数の白い蛆虫と、節足を持つフナムシのような海の這い回る虫たちが、そろそろと群れを成して這い出し、頬の肉を食い破りながら蠢いていた。

口は、パンパンに膨れ上がった唇からガスが逃げきれず顎を破壊し腐臭と共に発散していた。

その隙間からは、真っ黒に腐った歯肉と、緑色のドロドロとした腐水が滝のようにこぼれ落ちている。

『…は…る…か……』

腐水で溺れるような、ごぼり、という音が喉の奥で鳴る。

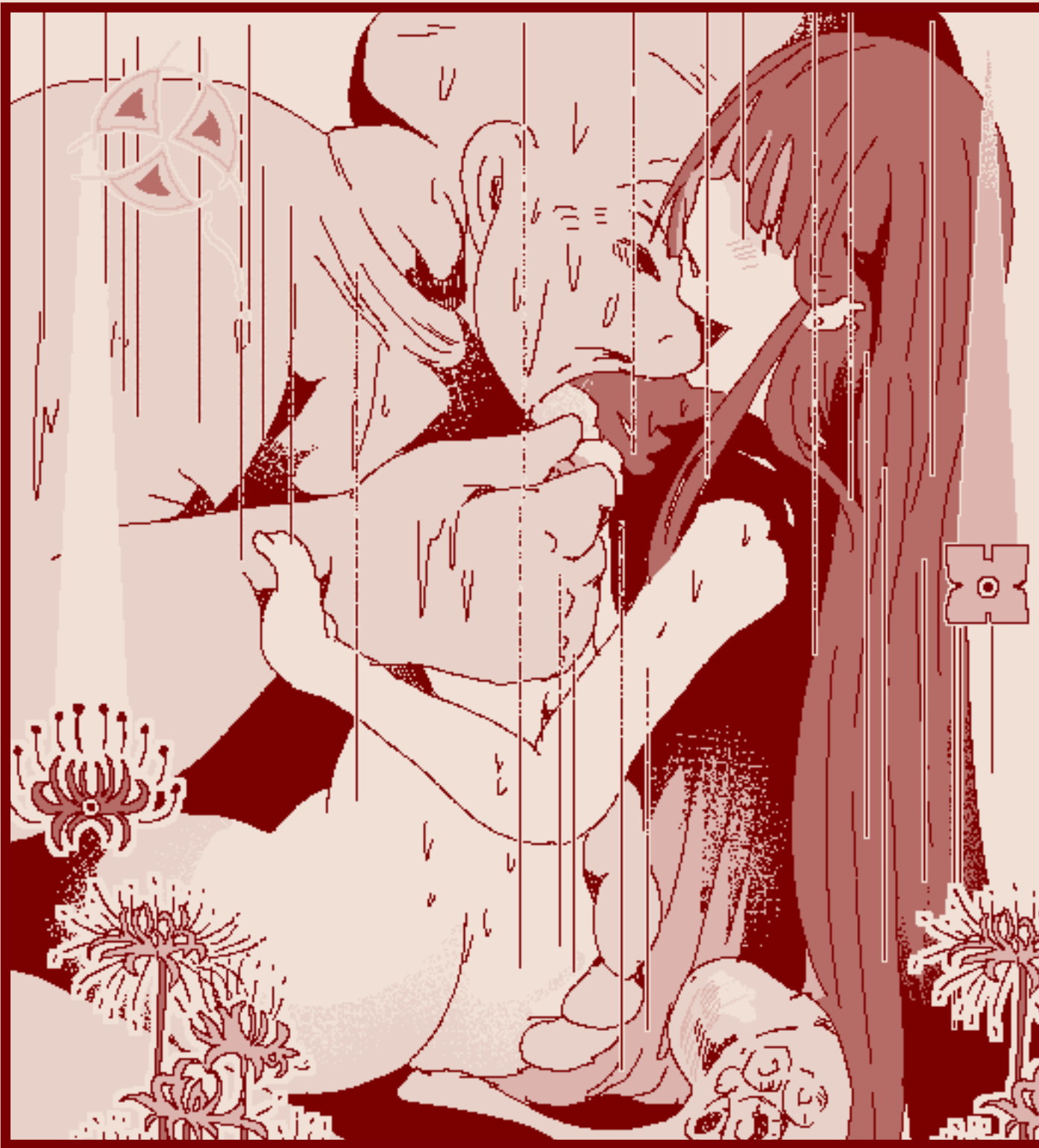
膨張した母親の腕が、ずるりと剥がれた皮膚を引きずりながら、遥の顔へと伸びてきた。

爪の間にヘドロと髪の毛が詰まったその指先から、ポタトリと、異臭を放つ蛆の塊が遥の頬に落ちる。

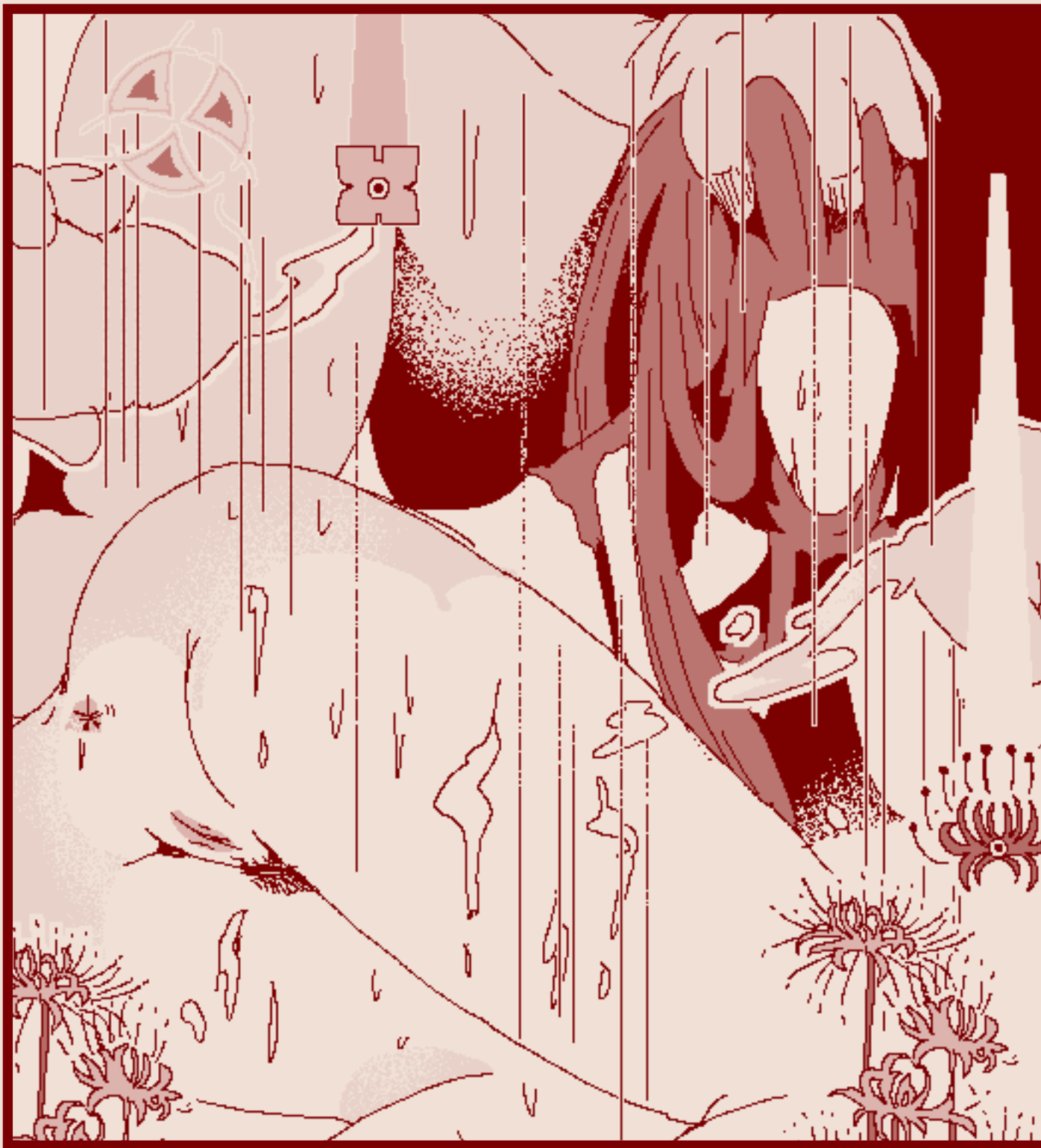
「いやああああああああああああっっっ!!!」

人間の精神の限界容量を優に超えた、絶対的な恐怖と狂気。

遥の口から、喉が裂け、血を吐くような絶叫が黒い夜の海に向かって木霊した。



網膜の裏側に焼き付いた、無数の蛆が蠢く両親の腐乱死体。
その幻視に精神を完全に破壊された遥の意識が、暗い泥の底から現実の儀式場へと浮上させられた。
だが、そこにあるのは救いではなく、さらなる絶望の延長でしかなかった。
遥の細く白い四肢は、冷たくぬめった亀甲紋の床板に力なく投げ出されていた。
瞳孔は開ききり、青い瞳からはもはや焦点はおろか、涙の艶すら失われている。ただ、浅く引き攣った呼吸だけが、彼女が辛うじて生きた肉塊であることを証明していた。
そんな虚ろな器へと成り果てた彼女を巨大な老いた赤ん坊がずしりと尻肉を楽しみ持ち上げた。
塩水でふやけ、ぶよぶよとたるんだ青白い老人のような皮膚。それでいて骨格の比率は乳児という、視覚の処理を拒絶したくなるような異形。
その巨大な顔面が、引き裂かれた衣服の下から露わになった遥の小さな乳房へと、ゆっくりと沈み込んでいった。
「…アア……ア……」
赤子の泣き声と、老人の噎れた呻き、そして波の碎ける音が混ざり合ったような悍ましいノイズが、遥の耳元で貼りつく。
巨大な口が開き、黄ばんだ不揃いな歯の奥から、ザラザラとした肥大した舌が這い出した。それは赤子が母乳を求めるような無垢な仕草ではなく、死肉に群がるヒルが血をすすするような、貪欲な接触だった。
じゅるり、と、強烈な腐臭を放つ唾液を撒き散らしながら、分厚い唇が遥の乳輪を丸ごと咥え込む。
「…っ。」
遥の口から、意味を成さない空気が漏れた。乳頭を舌の裏で執拗に転がされ、歯を立てて噛み吸われる。痛覚と、それを強引に神経のスパークへと変換しようとする粘液の媚薬成分が、彼女の身体をピクピクと痙攣させる。
だが、それは決して快樂ではない。自身の肉体が、人格を持った一人の少女から、共同体の怨念を現世に産み落とすための給餌器へと構造を変えられていた。
腐った海藻と鉄錆の臭いが遥の鼻腔を塞ぎ、老いた赤ん坊のたるんだ頬の肉が彼女の胸元にべちゃりと押し付けられる。圧倒的な生理的嫌悪。吐き気を催すほどの肌の密着。それらが、遥の尊厳という名の薄い膜を、少しずつ、しかし確実に削り取っていった。



儀式場を包む狂気は、さらにその湿度と熱を増していく。
舞台を囲む堕子たちが、這いながら狂乱を踏み始めた。
『名を戻せ』『潮を満たせ』『器に海を覚えさせい』

低い読経のような呟きが、やがて魚市場の競り声のようなけたたましい早口へと変質し、D-3のエラー音と完全に同期したリズムで空間を打ち据える。

彼らは自らの異形な身体を硬い床に叩きつけ、肥大した手で自らの顔や股間を掻き篋りながら、口から黒く濁った潮の飛沫を撒き散らした。

それは豊穡を祈る祝祭ではなく、死者が生者の肉を羨む狂騒だった。

遙を抱えた老いた赤ん坊もまた、興奮に巨大な眼球を不規則に泳がせ、口からとめどなく粘り気のある汚水を溢れさせた。

ぼたり、ぼたりと。

海底のヘドロを煮詰めたような、黒く生臭い腐水が、遙の白い頬へ、虚ろに開かれた唇へ、そして泥に汚れた胸元へと容赦なく降り注ぐ。

「ん…う、ぐ…っ。」

口の端に溜まった腐水が気管に入り、遙は力なく咽せた。だが、巨大な手によって顎を固定され、顔を背けることすら許されない。彼女の全身は、堕子たちが撒き散らす「帰還の儀式」という名の穢れた飛沫によって、頭の先からつま先までどろどろに汚されていく。

それは直接的な性行為を凌駕していた。

純潔な少女の身体が、異界の粘液によって文字通り染め上げられ、蔭洲升の母としての属性を強制的に書き込まれていく。

空ろな黒い瞳に、赤く腫れ上がった月が滲んで見えた。

(…もう、ええ…。)

遙の心の奥底で、最後の抵抗の火が消えかかっていた。どうせ自分は、あの日に死ぬべきだったのだ。この冷たい泥に塗れて、バケモノたちの苗床になることこそが、生き残ってしまった自分が支払うべき代償なのだと。



『戸口が、開く』

先導役の堕子が、粘りつくような声を上げた。

その言葉を合図に、遥の身体を押さえつけていた無数の手が、彼女の細い両足首をガッチリと掴んだ。

「あっ…!」

抗う間もなく、遥の両脚が床板の上で、強引に左右へと大きく押し開かれた。膝を曲げられ、最も無防備で秘められた部分が、死肉色の月光と堕子たちの視線の前に完全に曝け出される。

産褥の姿勢。あるいは、生贄を捧げる祭壇。

遥の股間の前に、一体の特に巨大な老いた赤ん坊が這い寄ってきた。

その股間からは、フジツボや細かい貝殻がびっしりと寄生した、どす黒く鬱血した触手状の巨大な陰茎が、意思を持つように鎌首をもたげている。

じゅるり、と、先端から糸を引くような濃密な粘液が滴り落ち、亀甲紋の床板を焦がすように濡らした。

「…ッ」

極限の恐怖が、遥の凍りついていて喉から引き攣った悲鳴を絞り出させた。

硬いフジツボの表面が、彼女の太腿の内側をザラリと撫で上げる。

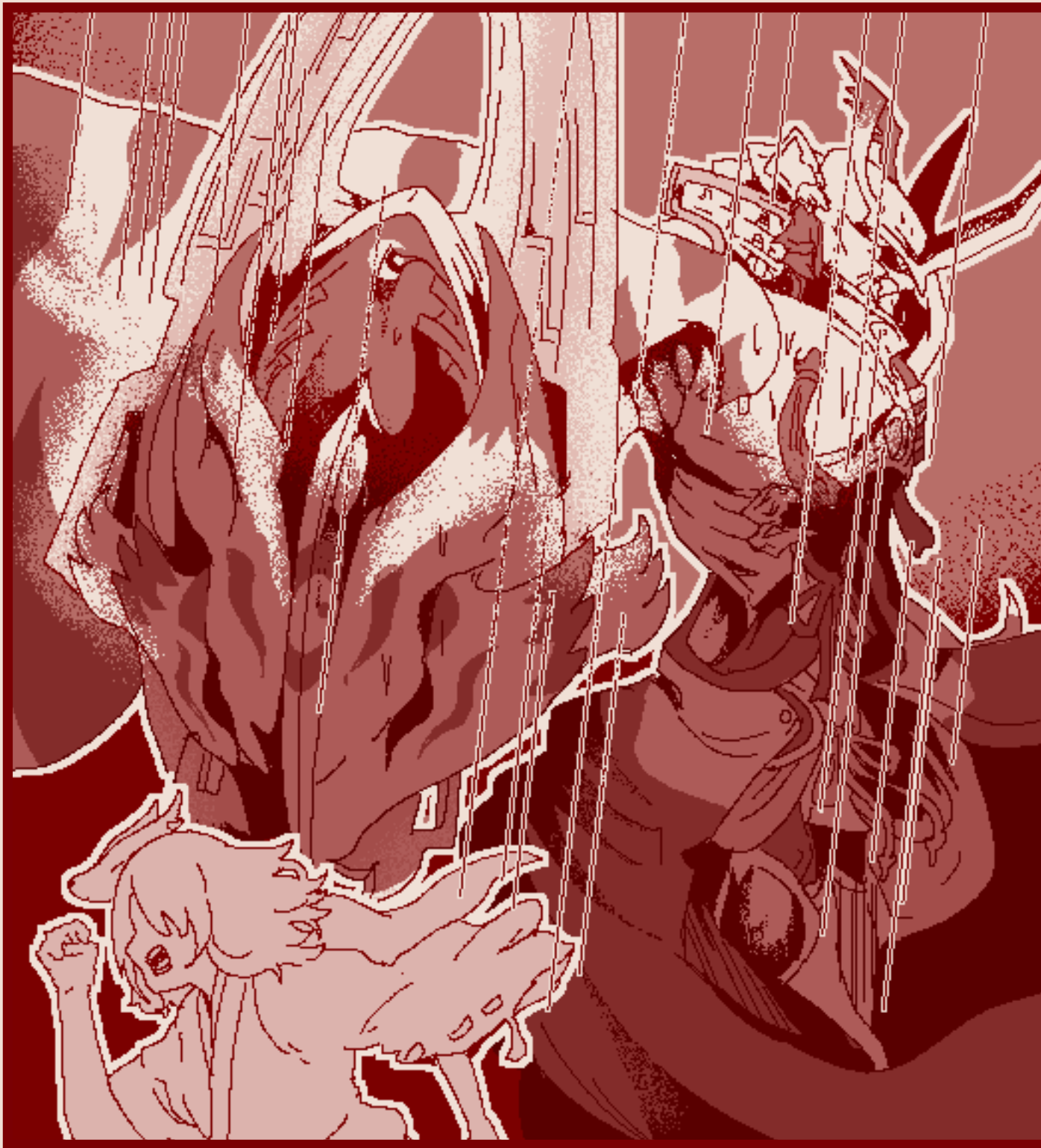
その熱を帯びた生臭い質量が、ついに遥の秘所の入り口へと真っ直ぐに向けられた。

あと数センチ。あと数秒で、このおぞましい肉の楔が彼女の最も深い場所を貫き、蔭洲升の呪われた泥を胎の奥底へと注ぎ込むだろう。

尊厳の完全なる破壊。人間としての生の終わり。

遥はきつく目を閉じ、奥歯を噛み締め、最後の一雫となった涙を頬に滑らせた。

—そして、異形の先端が、薄い粘膜に触れようとした、まさにその刹那だった。



空気を劈く、ガラスを引っ掻くような極大の高周波が、儀式場の重い波音を完全に掻き消した。

絶望的な距離を隔てた海のこちら側で、月彦の右手に握られたデジヴァイス iC と、伽夜子の青いデジヴァイス iC が、同時に、そしてかつてないほどの激しい光量で明滅していた。

「伽夜子さん!!」

「合わせるよ、月彦君!!」

「右手に月の真を!」「左手に陽の理を持って!」

「今!力を重ね!解き放つ!!!」

二人の声が完全に重なり合う。彼らの前に立つゲッコウガルルモンとガイオウモン、二体の究極体デジモンの身体が、青と赤の極光となって溶け合い、そして螺旋を描きながら空高くへと昇っていった。

二つの異なる頂点が交わり、神話すら超越する特異点が顕現する。

光の柱が弾け飛び、死んだ海を照らし出した。

そこに浮遊していたのは、全長四十メートルにも及ぶ、圧倒的な質量と神聖な武威を纏った武神、オメガモン・天叢雲（あめのむらくも）が顕現した。

武者兜を模した頭部、和服をはだけさせたような雄々しい腰布。その右腕にはゲッコウガルルモンの頭部を模した巨大な青白い弓が備わり、左腕にはガイオウモンの頭部から長く伸びる、炎を纏った絶刀の日本刀。

その存在自体が、蔭洲升の狂った空間に対する絶対的な拒絶だった。

オメガモンは、月彦と伽夜子を巨大な肩にふわりと乗せると、ゆっくりと左腕の絶刀を天段へと構えた。

そして、遥を隔てる暗く濁った陀金の海へ向けて、無造作に、ただ一太刀、刃を振り下ろした。

轟、という、世界が根底から割れるような音がした。

刃の軌跡から放たれた目も眩むような閃刃が海面を叩き割る。

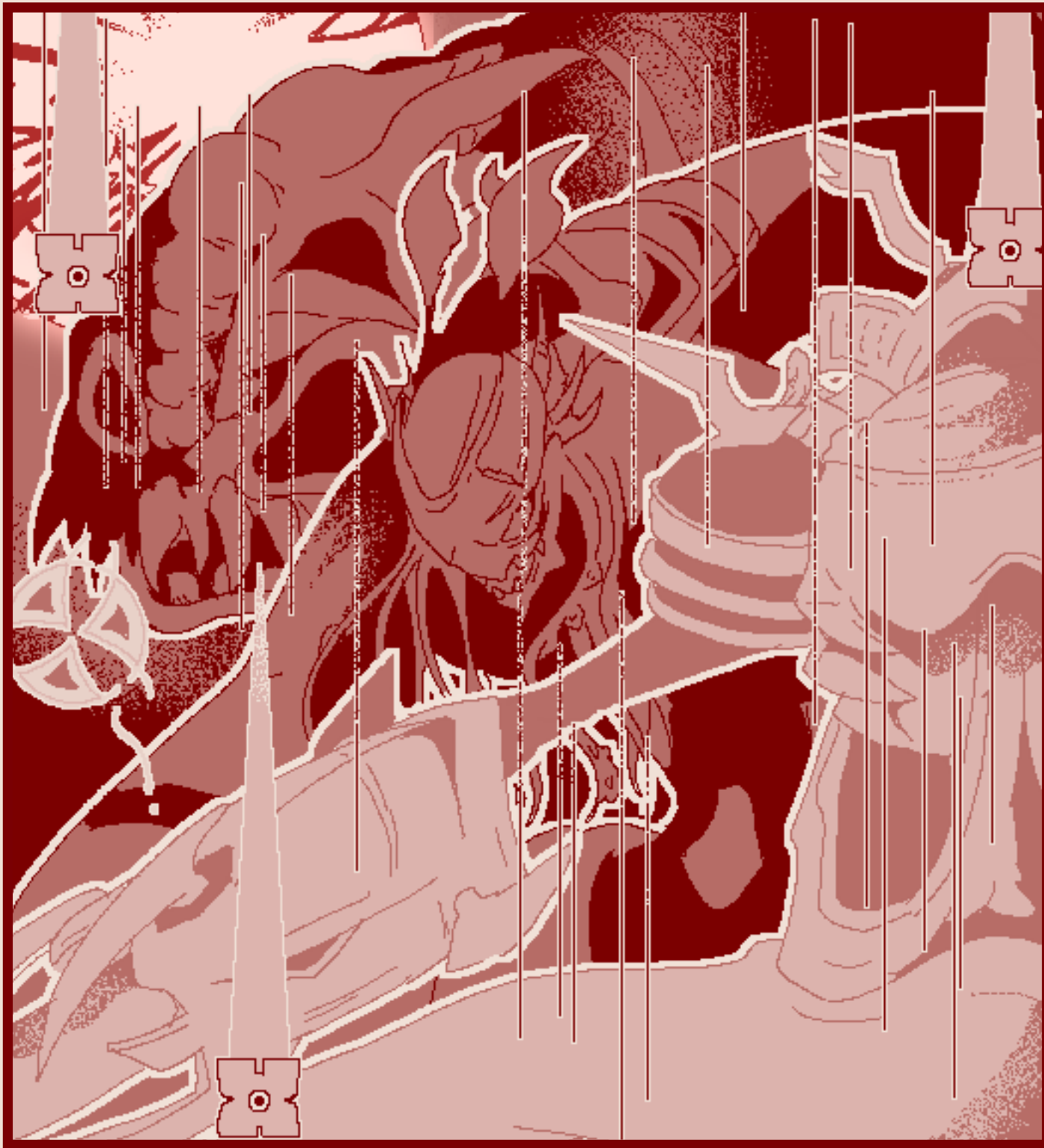
次の瞬間、左右にそそり立つ巨大な水の壁を残して、黒い海が真っ二つに割け、直線的な道が儀式場へと真っ直ぐに繋げた。

「行けええええッ!!」

月彦が、喉が張り裂けんばかりの絶叫で叫ぶ。

「任せときやあああッ!!!」

小都華が、泥だらけの素足で海底の基板を踏み碎きながら、弾かれたように走り出した。彼女の足元では、ベタモンが水飛沫を上げて並走し、肩にはクダモンがしがみついている。



小都華たちが割れた海の道を駆け出した直後、海底の底知れぬ闇がポコポコと沸騰するように泡立った。

「…月彦君。どうやら、彼らも本気で門を閉ざすつもりらしいよ」

伽夜子が扇子で指し示した先。

オメガモン・天叢雲の前に立ち塞がるように、左右の水の壁から二つの巨大な影が這い出してきた。

一つは、骨だけになった巨大なクジラの姿をしたスカルホエーモン。

もう一つはレガレクスモン。

どちらも、蔭洲升の偽の信仰に引き寄せられ、海の深淵から呼び出された本物の亡霊たちであった。

スカルホエーモンの巨大な肋骨の隙間からは怨念の瘴気が漏れ出し、レガレクスモンの鋭い牙は獲物を噛み砕くためにカチカチと鳴っている。

その圧倒的な威容を前にしても、月彦は微塵も怯むことはなかった。

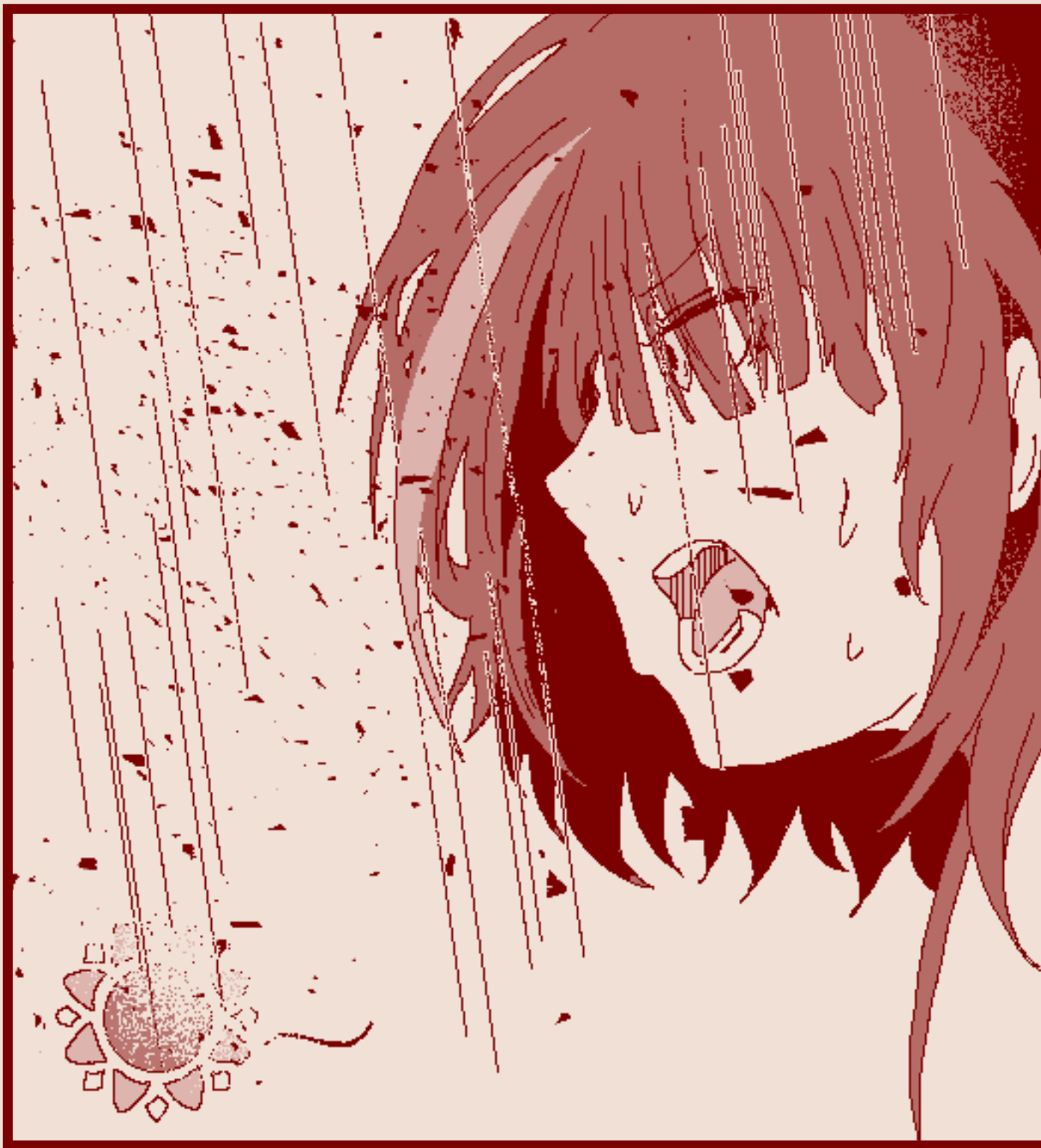
彼の眼差しは、走っていく小都華の背中をただ信じ抜いている。

「伽夜子さん。ここは、僕たちで引き受けます」

「当然だ。小都ちゃんたちの道を、一ミリたりとも邪魔させはしないよ」

オメガモン・天叢雲が、悠然と、だが山を切り崩すような重厚な足取りで一步前へ出た。左腕の日本刀に纏わった炎が、スカルホエーモンたちの放つ冷気を蒸発させる。

巨神と巨神の激突。その余波だけで、蔭洲升の空間が悲鳴を上げて軋み始めた。



小都華は、巫女服の緋袴の裾を重く濡らしながら、海底に敷き詰められた古い畳と電子基板の道が無我夢中で走っていた。

息が上がり、心臓が肋骨を突き破りそうなほど激しく脈打つ。足の裏はガラス片のような基板に切られて血を流していたが、そんな痛みなどどうでもよかった。

視線の先、儀式場の舞台の上で、醜悪な堕子の群れに囲まれ、四肢を開かされている遥の姿が見える。

絶望に瞳を閉じ、全てを諦めようとしているその横顔に、小都華は腹の底から怒鳴りつけた。

「アホかあああッ!! 遥さあああん!!!」

その声は、読経や讃美歌といった不気味な祝詞の壁を物理的にぶち破り、一直線に遥の鼓膜へと届いた。

遥が、弾かれたように目を見開く。

「目え開けや!! 諦めんな!!!」

小都華は走りながら、自分の持ち得る「生きた記憶」の全てを、言葉という名の弾丸にして遥へと叩きつけた。

「昨日、ブルーハワイのかき氷食うて、舌真っ青にして笑とったやろ!!!」

堕子たちが、邪魔者の闖入に気づき、不快な呻き声を上げる。

「ラムネのビー玉ひとつ上手く押し込めへんで、ウチに手伝わせたくせに!!!」

距離が縮まる。あと数十メートル。

「焼きとうもろこし落としたくらいで、この世の終わりみたいな顔して悔しがとったやろが!!!」

遥の青い瞳から、虚無の濁りがパラパラと剥がれ落ちていく。

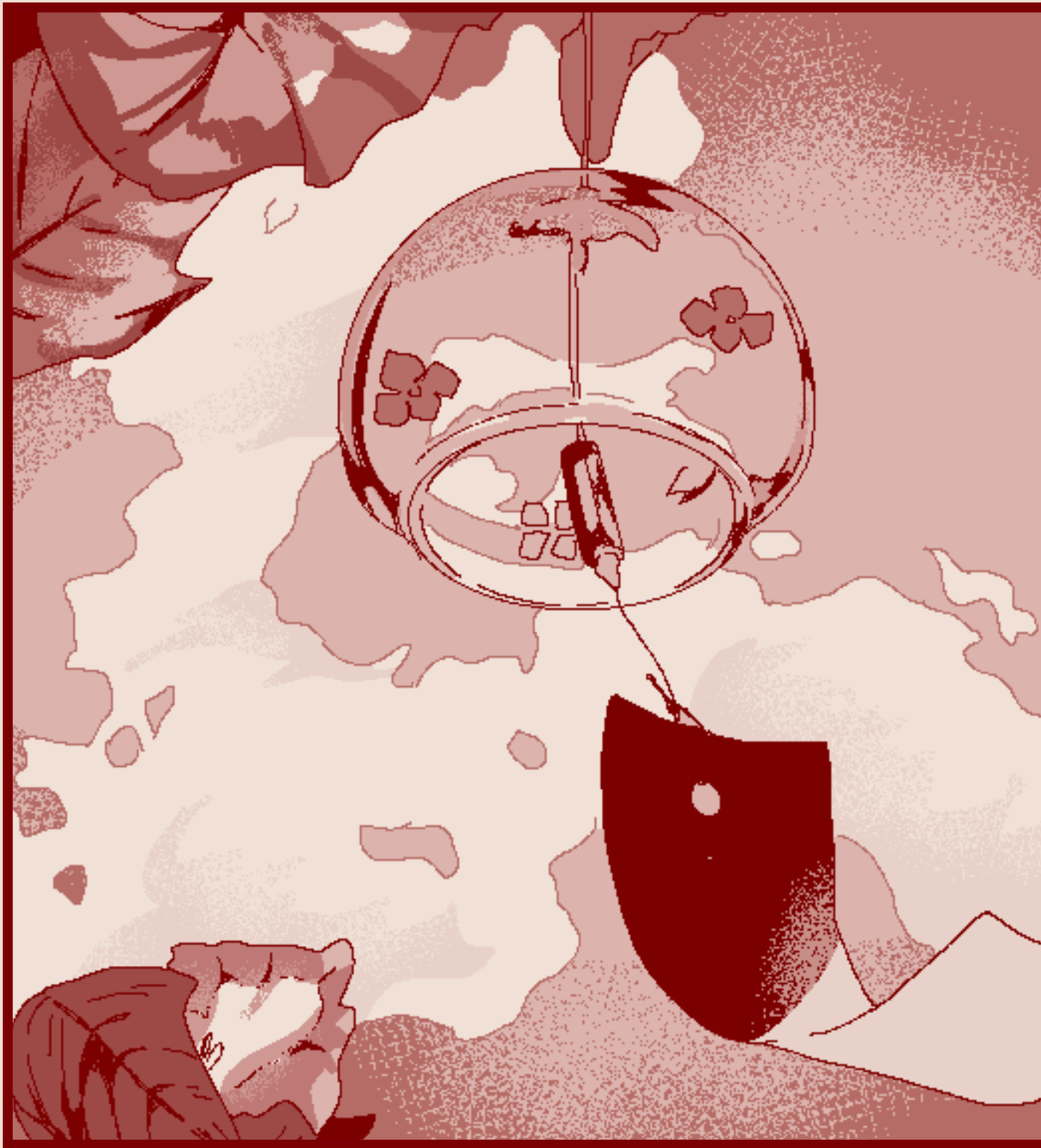
そこにフラッシュバックするのは、暗い海の幻影ではない。あの波止場の強烈な日差し、冷たい氷の舌触り、醤油の焦げる匂い、そして小都華の騒がしい笑い声。「これからだって!! そんな事ごっつあるんや!!! 遥さんのオトンもオカンもあんたをこんな事の為に産んだんちゃうわ!!!」

小都華の目から、ボロボロと大粒の涙が溢れる。

「あの日、資料館でウチの手を握り返したん、嘘やったんか!!」

小都華は息を大きく吸い込み、魂の底から最後の言葉を放った。

「ウチらと一緒に帰りたいって、自分で言ええええッ!!!!」



風鈴の音が、遠くから聞こえた。

極限の恐怖によって破壊されかけた遥の意識は、ふと、薄皮一枚を隔てたような奇妙な静寂の中にあった。

気がつけば、彼女は夏の王港町の路地に立っていた。痛いほどに白く明るい日差し。アスファルトに落ちる濃い影。鼻腔をくすぐる潮風の匂い。

だが、先ほどまでの肌を焦がすような熱気も、息苦しさもない。すべてがセピア色に退色し、古いフィルム映画の中に入り込んだように穏やかで、痛覚も恐怖も綺麗に濾過されていた。

(…ウチは、どうしたらええんやろ。)

目前には、見覚えのある二つの背中があった。

振り返った両親の顔は、もう蛆が蠢き腐水に溺れる醜悪な水死体ではなかった。いつか見た、記憶の中の、優しく微笑むありし日の顔だった。

『遥。ウチらと一緒に、蔭洲升に帰ろう』

母の声がした。それは怪異が模倣した水泡混じりのノイズではなく、鼓膜に心地よく響く、甘やかな声音だった。

これについて行けば、もう苦しまなくていい。罪悪感に苛まれ、自分を責め続け、あの暗い海を睨み続ける日々は終わる。何も考えず、ただこの優しい温度のなかに溶けてしまえばいい。

遥はこくりと頷きかけ、両親の差し出す手を取ろうと、ゆっくりと腕を上げた。



気がつけば、三人は夏の海の浅瀬を歩いていた。
足首を浸す海水は、羊水のように生温かく、足を動かしても一切の抵抗がなかった。
水面はあり得ないほどに透明で、サファイアを砕き散らしたようにキラキラと輝いている。空と海の境界線が溶け合い、どこまでも果てしなく続く、残酷なほどに美しい青の世界。
苦痛も、悲しみもない、永遠の静寂。
両親が前を歩き、遥がその後ろをついていく。
だが――。

「ウチらと一緒に帰りたいって、自分で言ええええッ!!!!」

ガラスを叩き割るような小都華の絶叫が、遠くから、遥の脳髓を直接揺さぶった。
その声には、ラムネの瓶の冷たさ、焦げた醤油の匂い、舌を染めたかき氷の青、そして泥に塗れて泣き叫ぶ生者の熱が、ぎゅーと詰まっていた。

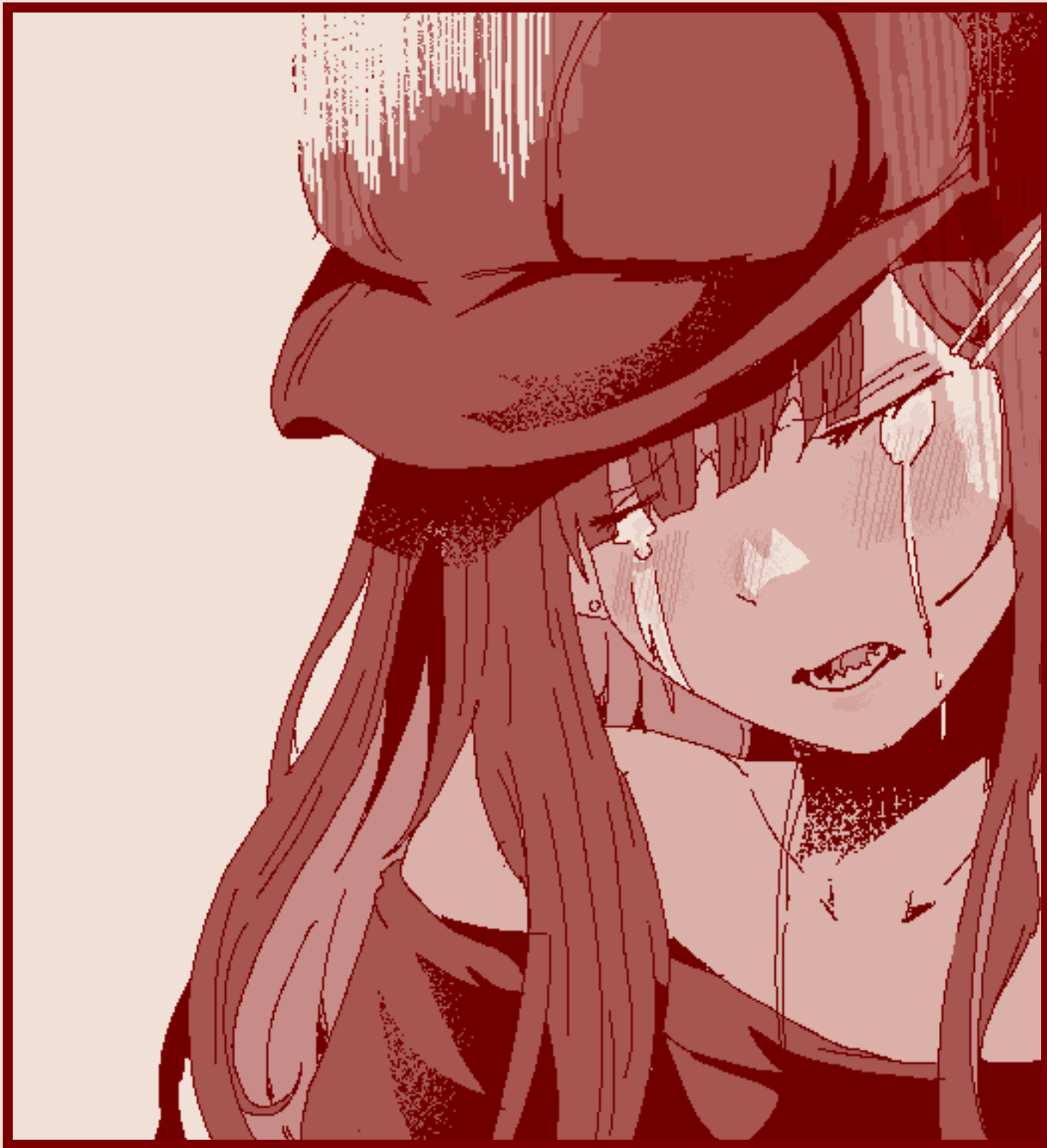
ピタリ、と。
遥の足が、浅瀬の中で止まった。

『どうしたんだい、遥』

父親が優しく振り返る。

遥は、きつく唇を噛み締めた。そして、ゆっくりと首を横に振った。
「ごめん……お父さん、お母さん」

遥の口から出た言葉は、先ほどまでの自罰的な謝罪とは違っていた。
「ウチ、そっちには……お父さんたちのところには、行けへん」
『なぜだい？　ここなら、もう誰も泣かなくていいんだよ』



遥の目から、大粒の涙がポロポロとこぼれ落ち、透明な水面を叩いた。
「…友達が、できたんよ」

遥は、両手で顔を覆うようにして泣きじゃくった。
「乱暴で、ガサツで、口悪くて、でもウチのこと本気で怒ってくれる……友達が。」

脳裏に浮かぶのは、自分を助けるために泥だらけになり、醜悪な化け物に凌辱されながらも、決して瞳の光を失わなかった少女の姿だった。

「ベタモンも…前の相棒の代わりなんかやない。

今のウチの、大事な相棒なんよ。月彦はんも、伽夜子はんも…ウチみたいなもんを心配して、あんな危ないトコまで、泥だらけになって来てくれた」

罪悪感は消えない。両親を失った悲しみも、海への根源的な恐怖も、一生消えることはないだろう。

それでも。
「ウチは……また小都ちゃんたちに会いたい。一緒に、笑いたいんよ」

死者の声に耳を傾けるのではなく、今、自分のために泥だらけになっている生者の声に応えたい…何より自身が生きたいと願った。

遥は嗚咽を漏らしながら、何度も何度も頭を下げた。
「ごめん…ごめんなさい…ッ。」



遥が顔を上げると、両親は怒っても、悲しげな顔もしていなかった。

『…そう』

母親が、生前の穏やかな微笑みを浮かべた。

『行きなさい、遥』

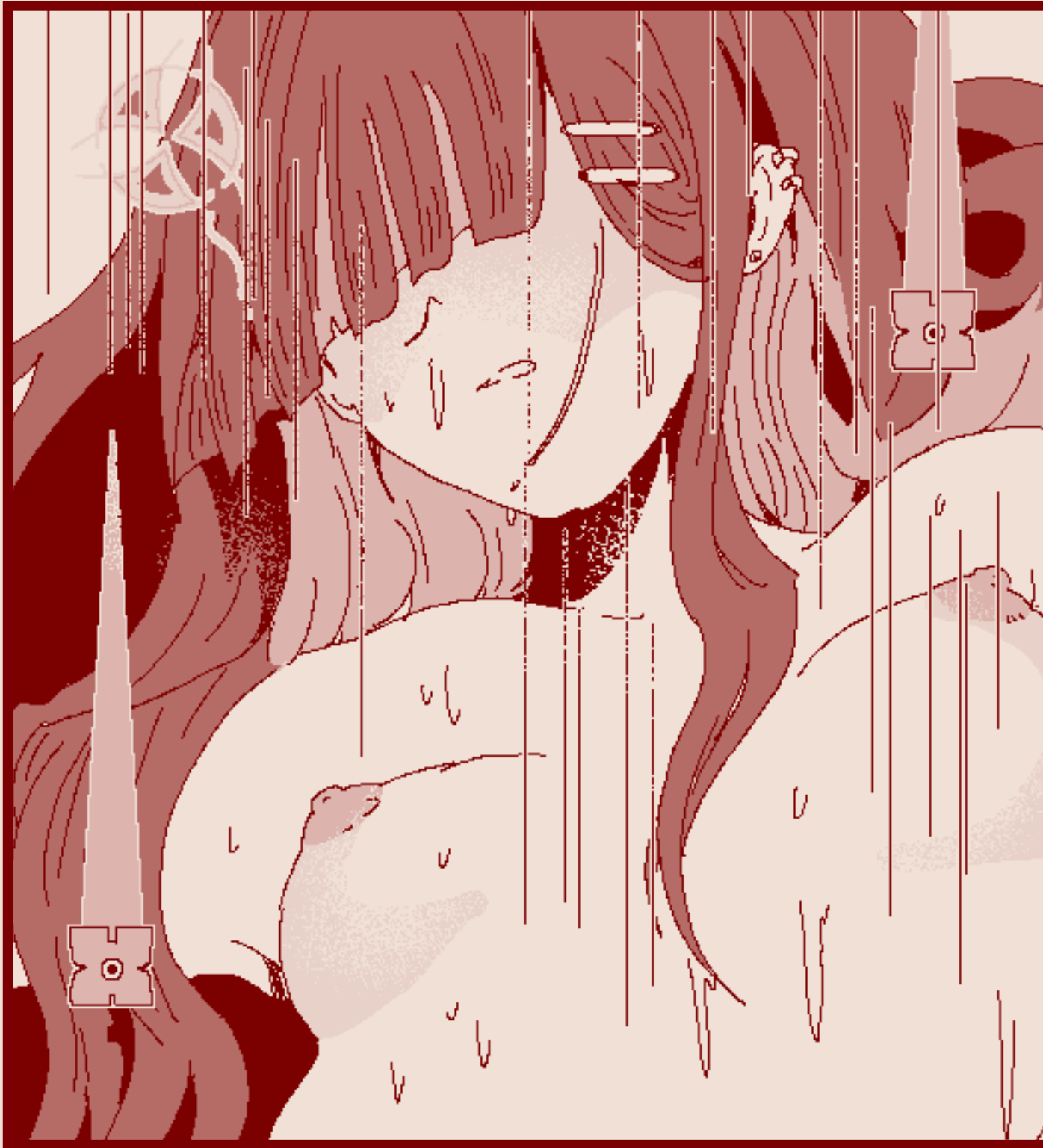
父親もまた、優しく頷いている。

「ええの？」

『…ああだって遥は一。』

それは、蔭洲升というシステムが遥を縛り付けるために用意した両親の声ではなかった。

夏の海と日差しに溶けていく。



「…かえり、たい…」

床板に押さえつけられていた遥の唇が、かすかに動いた。

虚無に沈んでいた青い瞳に、はっきりと生者の光が灯る。

「小都ちゃんと、みんなと…一緒に…帰りたい…!」

それは、小さくも明確な、遥自身の意志だった。

墮子たちが一斉に不快なノイズを上げ、遥の四肢をさらに強く拘束しようとした。

遥の引き裂かれた衣服の残骸。そこに転がっていた青い D-3 が、けたたましい警告音と共に、強烈な発光を放った。

画面を埋め尽くしていたエラーコードが一掃され、正常なデジソウルの光が溢れ出す。

その光は、オメガモン・天叢雲が切り開いた海の道を疾走してくるベタモンとクダモンの身体を真っ直ぐに包み込んだ。

「ハルカァァァアッ!!!」

ベタモンの叫びが重なる。

光の奔流の中で、緑色の小さな身体が長大な海竜へと変容する。水飛沫を上げて顕現したのは、成熟期デジモン、シードラモン。

同時に、クダモンもまた純白の八枚の翼を広げ、神聖なる天使、エンジェウーモンへと再進化を果たした。

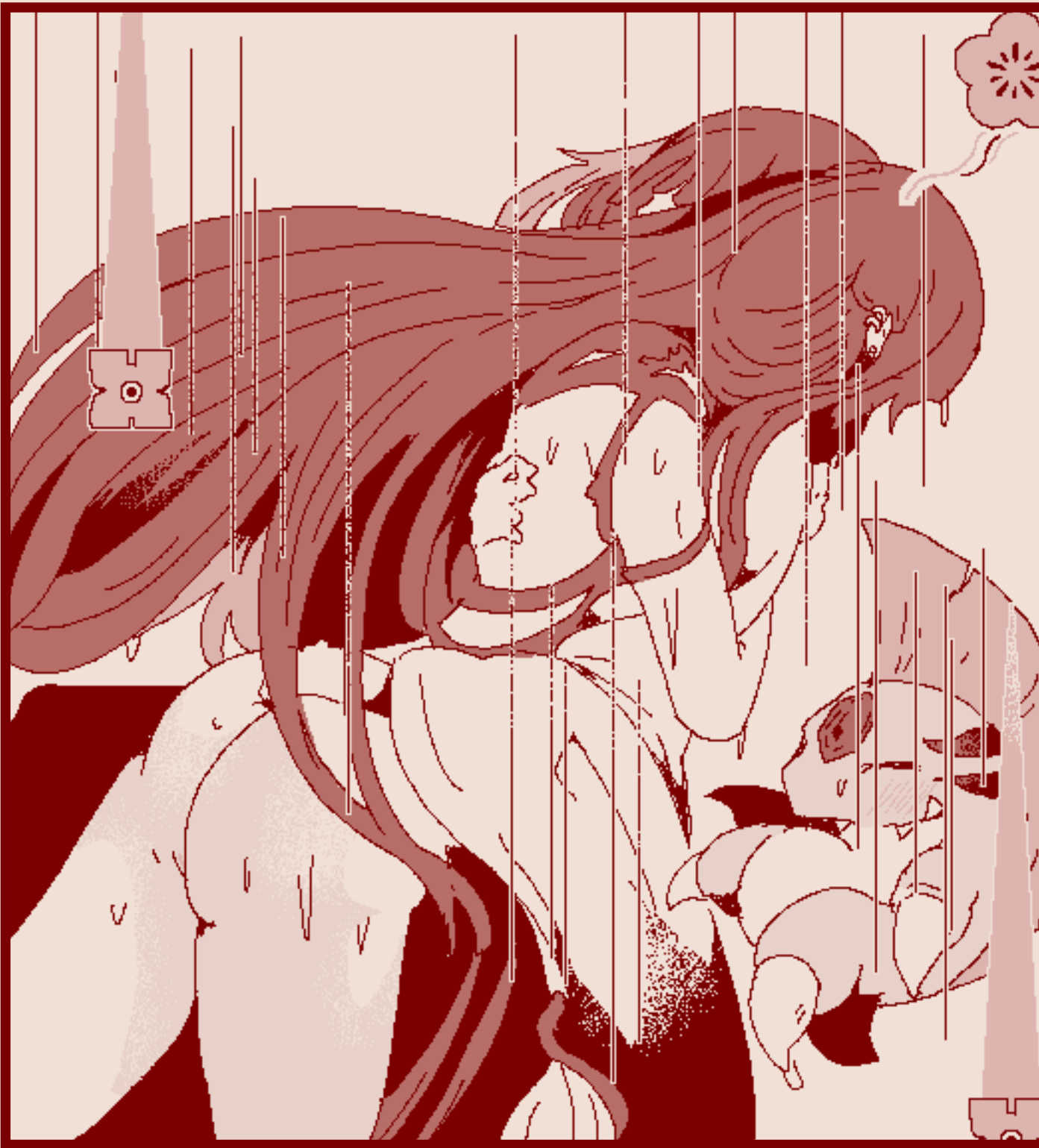
「舐めんなやァッ!!」

エンジェウーモンが空高く舞い上がり、両手でホーリーアローを番える。

シードラモンが巨大な尾を水面すれすれで振り抜き、遥に群がっていた老いた赤ん坊たちを文字通り木っ端微塵に弾き飛ばした。

「ギェァァァァアッ!?!」

神聖な矢と、荒れ狂う水流の直撃を受けた墮子たちは、醜悪な肉体を維持できず、黒い泡となって儀式場の床に次々と崩れ落ちていった。



「遥さん!!」

弾き飛ばされた墮子の隙間を縫うようにして、小都華が儀式場の舞台へと滑り込んだ。

彼女の足元で、轟音と共に割れていた海がゆっくりと閉じ始め、オメガモンの絶刀による道が元の暗い海面へと戻っていく。だが、もう逃げ道がなくなったという絶望感は微塵もなかった。

小都華は、全裸のまま身体を震わせている遥のもとへ駆け寄る。

遥がそのまま思い切り抱きしめた。

「小都、ちゃん…っ」

「アホ!アホ! どんだけ心配したと思っとるんや!!」

小都華の体温。泥と汗の匂い。そして、耳元で張り上げられる大きな声。

遥は小都華の背中に腕を回し、顔を埋めて声を上げて泣いた。

「ごめん…ごめんな…っ、小都ちゃん、小都ちゃん……!」

「もうええ!もうええから!」

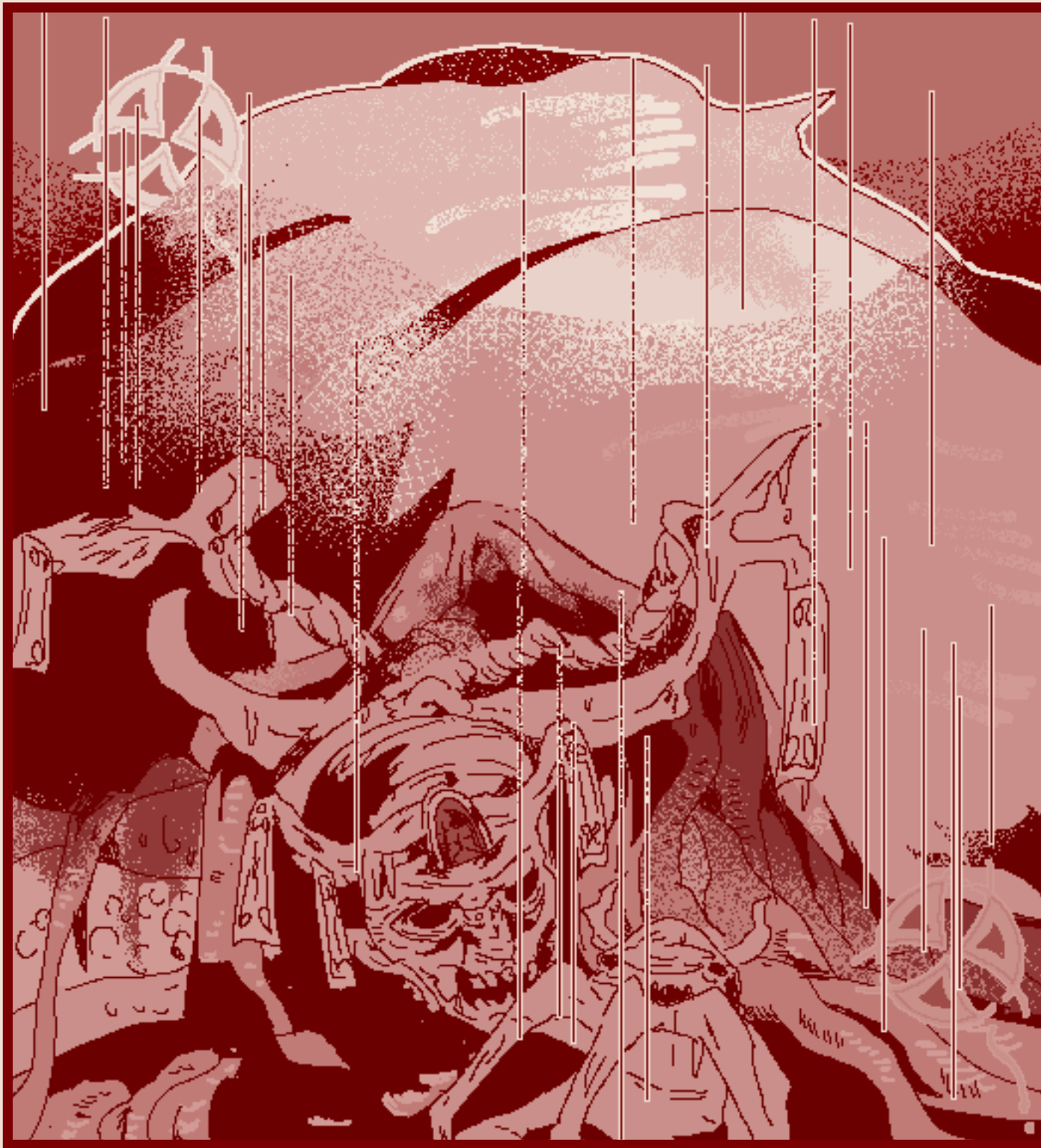
二人の少女が、泥だらけの儀式場の中心で、互いの名前を何度も呼び合いながら抱き合って泣いている。

その傍らでは、巨体を解いて小さな緑色の姿に戻ったベタモンが、鼻をすするような音を立てながら、嬉しそうにその光景を見上げていた。

「…へへっ。遅えんだよ、バカハルカ」

「ベタモンも…ありがと…流石はウチの相棒や。」

それは、神の儀式でも、死者の供養でもない。ただの不器用な生者たちが、泥と涙に塗れて生を掴み取った瞬間だった。



遥の帰りたいという意志の言葉が、蔭洲升の偽りの祭礼を完全に破壊した直後だった。

儀式場の舞台の奥、分厚い帳の向こうに安置されていた潮胎殻…女性の身体と深海魚が混ざり合ったような、腐敗した遺骸が、突如として悍ましい痙攣を始めた。

びち、びち、という、水揚げされた魚が甲板で跳ねるような音が響く。

遺骸を包んでいた乾かない白布が、内側から膨張する巨大な圧力に耐えきれず、鈍い音を立てて引き裂かれた。

中から溢れ出したのは、羊水などではない。鉄錆と腐った海藻を煮詰めたような、真っ黒な汚泥だった。

それは誕生という生命の神秘からは最も遠く離れた、不浄なる吐き戻しであった。

ずぶり、と。

引き裂かれた子宮の裂け目から、這い出してきた何か。

全長にして五メートルはある塊。

その輪郭は、確かに大人男性の比率を保っていた。頭部が異様に大きく、手足は短く太い。だが、その皮膚には生後間もない瑞々しさなど微塵もなかった。長時間、塩水に漬けられて極限までふやけ、赤子…そして老人のように幾重にもたるみ、深い皺が刻まれた、死肉色の青白い皮膚。

その巨大な顔面には、まばたきを忘れた白濁した眼球が嵌め込まれ、半開きの口からは、不揃いに黄ばんだ成人の歯が剥き出しになっていた。

肩や胸、脇腹にかけては、軟骨と肉が異常に隆起し、鎧板のような形状を作り出し、大刀の様な胎盤を抱えていた。

『エ…エフゥ…エ…エえ…。』

口から漏れたのは、赤ん坊の産声と、老人の嘎れた嗚咽、そして波の碎ける音が無理矢理に縫い合わされたような、鼓膜を削るノイズだった。

這い出した巨大な老いた赤子は、自らが引き裂いた遺骸の胎盤と、極太のへその緒を自らの右腕にぐるぐると巻き付けていた。

どす黒い膜に覆われたそれは、まるで禍々しい大剣のように長く伸び、先端から生臭い血と粘液を滴らせていた。

生理的嫌悪の極致。平山夢明的な、視神経を直接汚染するような圧倒的な醜悪さが、舞台の上を這い回っていた。



「…なんなんや、あれ…っ。」

「クソ…ここまで来て…!」

小都華は、遥を底うように立ち塞がりながら、そのあまりの悍ましさに胃液が込み上げてくるのを必死に堪えていた。

割れた海の道を挟んだ向こう岸から、月彦がデジヴァイス iC の画面を睨みつけた。

(NO DATA…ERROR…! 駄目だ、個体の識別ができない…! 祭壇にあるって事はアレが蔭洲升の核か?)

あの姿形…死肉と臓物で模造してるとはいえ…!)

「スサノオモン…っ。」

それは、伝承に名を残す東方の神の力を、極めて冒流的な形で現世に引っ張り出そうとする蔭洲升の悪意の結晶だった。

「小都華さん!! アマテラスモンに進化させてください! アレを打ち破るには!!!!」

月彦の切迫した叫びに、小都華はエンジェウーモンを見上げた。

だが、純白の八枚の翼を持つ天使は、膝をつき、苦しそうに肩で息をしていた。「…!」

小都華が悲痛な声で返す。

「ウチもクダモンも、身体に力が入らへん…! なんか、見えない泥みたいなもんが、身体のコにへばりついとるみたいで…!」

空間の裂け目の傍らに立つ伽夜子が、扇子を鋭く閉じて舌打ちをした。

「…当然だ。アレは蔭洲升の…核…墮子たちの執念が極限まで濃縮された領域でもある。

神聖な進化を阻害するものが溢れたんだろう。」

伽夜子の分析の通り、老いた赤子が現れてから濃くなった腐臭と重い湿気は、ただの空気ではなく、デジモンのデジコアの活動を強制的に沈静化させる呪いであった。

「…このままじゃ…!」



老いた赤子が太くたるんだ脚で、塩を噛んだ亀甲紋の舞台を大きく踏み鳴らした。その一步は単なる重量によるものではない。周囲の空間にへばりついていた腐った海藻と焦げた基板の臭いが一気に圧縮され、爆発的な圧迫感となって小都華たちの肺を押し潰す。

「シードラモンッ!!!」

「エンジェウーモンッ!!!」

遙と小都華の絶叫が、死んだ空気を切り裂いて交差する。

老いた赤子の右腕から伸びる巨大な胎盤の剣が、唸りを上げて横薙ぎに振り抜かれた。

それは光を帯びた神聖な刃などではない。赤黒い膜に覆われ、脈打つ臍帯が絡み合った、死肉と臓物である。

空気を斬るのではなく、空間に刻まれた生者の帰属先を削り取るような、悍ましい軌跡を描く黒い斬撃だった。

迎え撃つべく飛び出したシードラモンの青い巨体が、宙で激突する。シードラモンは鋭い牙で肉の剣を食い破ろうとするが、刃から溢れ出す濃密な呪詛の波に押し返される。

「ぬ!?!? あああっ!」

続いて展開されたエンジェウーモンの神聖な防壁も、触れたそばから古い写真のフラッシュのように濁り、ひび割れていく。

彼女の純白の八枚の翼は、この儀式場を覆う墮子たちの執念——目に見えない泥のような湿気——に絡め取られ、機動力を完全に奪われていた。

黒い斬撃が、二体のデジモンの腹部を容赦なく直撃する。



「シードラモンッ!!!」

「エンジェウーモンッ!!!」

遥と小都華の絶叫が交差する。

老いた赤子が、太くたるんだ脚で舞台の床を強く踏み鳴らし、渾身の力を込めて胎盤の剣を横薙ぎに振り抜いた。

黒い斬撃が、二体のデジモンの腹部を直撃した。

神聖な純白の衣が裂け、シードラモンの青い鱗が碎け散る。二体はくの字に身体を折り曲げながら、砲弾のように吹き飛ばされ、遥と小都華のすぐ目の前、塩を噛んだ亀甲紋の床の上に、仰向けに激突して倒れ込んだ。

「…嘘やろ…。」

小都華の顔から血の気が引く。

老いた赤子が、二人の少女へ向かって、その巨大な影を落としながら歩み寄ってくる。

見上げるほどの巨軀。腹の肉の隙間をパクパクと開閉し、声なき呪詛を吐き出している。

むせ返るような腐臭と、見下ろしてくる焦点の合わない巨大な眼球。

それは、もはや足掻くことすら許されない、死という物理的な壁が迫ってくるような、圧倒的な絶望感だった。

老いた赤子が、トドメとばかりに胎盤の剣を高く振り上げる。

月彦も伽夜子も、遠く離れた対岸からでは物理的に間に合わない。

小都華が遥を庇うように抱きしめ、固く目を閉じた。

—その、絶体絶命の瞬間だった。

舞台のさらに奥、霧の中に聳え立つ狂気的な石造遺跡群。

そこに、かつて何者かによって碎かれ、散らばっていた巨大な石像の破片から、突如として、目が眩むような黄金の光が溢れ出したのだ。

それは、この死んだ海には絶対に存在し得ない、生命と太陽の輝き。

光の奔流が一直線に舞台へと降り注ぎ、泥に塗れて倒れ伏すエンジェウーモンとシードラモン、そして、抱き合う小都華と遥の身体を、温かく、力強く包み込んだ。

「ここに眠ってたのは間だけじゃなかった…。」



光のドームの中で、小都華は目を開けた。
身体にへばりついていた重い泥の感覚が、嘘のように消え去っている。冷え切っていた手足の先まで、熱い血が巡るような力強い脈動を感じた。
「…遥さん」
小都華が声をかけると、彼女の腕の中で震えていた遥が、ゆっくりと顔を上げた。
遥の青い瞳には、もう過去の幻影に囚われた暗い靄はなかった。そこにあるのは、自らの足でこの世界に立ち、生きることを選んだ生者の、鋭く澄んだ意志の光だった。
「…まだ、終わらへんよ」
遥は立ち上がると、自らの右手に、青い D-3 を強く握りしめ、天へと構えた。
小都華もまた、不敵な笑みを浮かべて立ち上がり、左手に神社の強力な護符を指の間に挟んで構える。
光の奔流の中で、遥の空いた左手と、小都華の空いた右手が、互いを求めるように重なり合った。
痛いほどに指を絡ませ、しっかりと手を繋ぎ合う。
それは、死者の論理に抗うための、何よりも確かな生者の手触りと体温だった。
「いくで、遥さん!!」
「ええよ、小都ちゃん!!」
繋いだ手を高く掲げ、小都華は腹の底から、蔭洲升の淀んだ空気を震わせるほどの声量で絶叫した。
「進化やァァァァアッ!!!!」

二人の少女の決意の叫びと、固く繋がれた指先から放たれる莫大なデジソウルが、黄金の光のドームの中で臨界点を突破した。

遥の握る青いD-3から、暗く淀んだ死の海を真っ二つに裂くような鮮烈な蒼の光条が天を貫く。小都華の左手に挟まれた護符からは、真夏の太陽を極限まで濃縮したかのような黄金の光芒が溢れ出し、光と幾重にも螺旋を描いて天蓋へと立ち昇った。

光の奔流の中心で、仰向けに倒れ伏していたシードラモンが、海面を震わせる咆哮を上げた。

長大な海竜の巨躯が、物理的な質量を失っていく。

青い鱗と強靱な水掻きが、目も眩むようなデジコードの輝くリングと、清冽な激流そのものへと分解されていく。それは死ではない。個という境界を溶かし、より高次の神話的領域へと至るための、同化のプロセスであった。

無数の光の輪と化したシードラモンのデータが、純白の翼を広げて立ち上がるエンジェウーモンの身体の足元から、天へ向かって巻き上がるようにして螺旋の軌跡を描き始めた。

冷たく腐臭に満ちていた蔭洲升の空気が、清らかな水の気配と、肌を焼くような太陽の熱によって急速に浄化されていく。水と光が交じり合い、エンジェウーモンの神聖な肉体を、圧倒的な密度のエネルギーの薊が完全に包み込んだ。

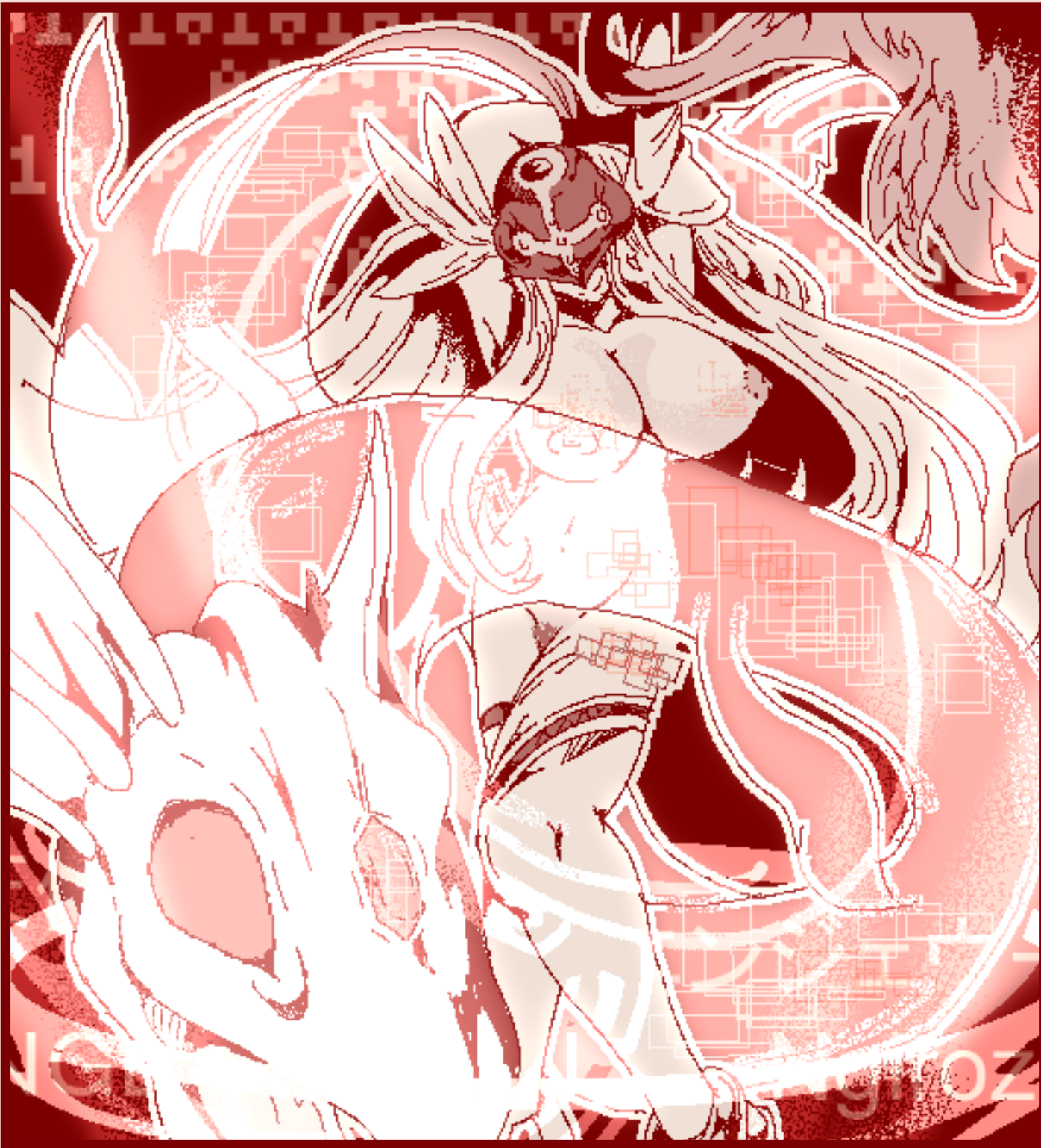
エンジェウーモンを包み込む光の繭の中で、シードラモンのデータを構成する神聖な水流が、彼女の純白のボディスーツを洗い清め、そして新たな形を持った重装甲へと再構築していく。

女性的な曲線を残す真っ白な素肌を覆うように、黄金に輝く太陽の意匠が施された重厚な胸当てが、熱を帯びて形成される。両肩には、神話に語られる八咫鏡を思わせる、真円の輝く肩当てが装着された。腰の周囲には、巨大な翠色の勾玉を幾重にも連ねたような装飾が、澄み切った硬質な音を立てて円陣を組む。

シードラモンを構成していた蒼い鱗のデータは、エンジェウーモンの手足を覆う流線型の籠手と具足へと変貌し、水と氷の冷たさを秘めた刃となって組み込まれた。

そして、彼女の背に広がる八枚の純白の翼が、内側から激しく燃え盛る太陽のフレアを模した、幾筋もの巨大な光の輪郭へと形を変えていく。それは、神仏の背に輝く圧倒的な後光そのものだった。

冷たい雨と泥の匂いに沈んでいた異界の空間に、決して昇ることのなかった太陽が、確かな質量と熱を伴って顕現しようとしていた。





光の柱が四散し、死肉色の月光を完全に打ち消した。

黒く煮詰まった海水のうねりが静まり返り、空間の湿度が極限まで焼き尽くされる。
「大きい…。」

「まさしく…光の巨人だね…。」

そこに神々しく立ち上がったのは、身長五十メートルを優に超える巨大な神人のアマテラスモンであった。

背後の沖合に聳え立つ、緑がかった黒い石で組まれた非ユークリッド幾何学的な狂気の遺跡群ですら、高さ四十メートル程の影に過ぎない。アマテラスモンは、その残骸を、完全な高みから見下ろしていた。

光輝く太陽の冠を頂き、後光を背負うその姿は、いかなる邪悪な論理も寄せ付けない絶対的な神威を放っている。

アマテラスモンの左右の巨大な肩当ての上には、小都華と遥がそれぞれ立っていた。

彼女たちの足元は神聖な力場によって固定されており、眼下に広がる醜悪な儀式場と、自分たちを泥に沈めようとした狂った世界を、確かな生者の瞳で見据えていた。



『……ッ!!』

儀式を破壊され、現世への戸口を塞がれた老いた赤子が、泥水の沸騰するような咆哮を上げた。

老いた赤子を海が包み縫い合わせアマテラスモンと匹敵する巨体へと変質させ醜悪な肉を波打たせながらアマテラスモンへと突進する。

「来よるで、アマテラスモン!!」

小都華の叫びと同時、アマテラスモンが地を蹴った。

五十メートルを超える黄金の巨軀が、その質量からは信じられないほどの神速で遺跡群の上空へ舞い上がる。アマテラスモンが踏み切った海底の基板や岩礁が、踏み込みの余波だけで粉々に砕け散り、巨大な水柱が天を衝いた。

老いた赤子もまた、異常に発達したたるんだ脚力で跳躍し、空中でアマテラスモンへと迫る。

視神経の処理を拒絶するような歪な石造建築の間を、二体の規格外の巨星が縦横無尽に飛び交う。アマテラスモンが黄金の残像を残して遺跡の壁面を蹴り渡れば、老いた赤子は障害物となる尖塔を肉の塊のまま突き破り、執拗にその後を追う。

巨大な質量同士が空中で交錯するたび、衝撃波が空間を叩き割り、眼下の海面がすり鉢状に大きく窪んだ。



老いた赤子が右腕に巻き付けた巨大な胎盤の剣を死肉と臓物で冒瀆的に模造した刃を、風車のように振り回す。

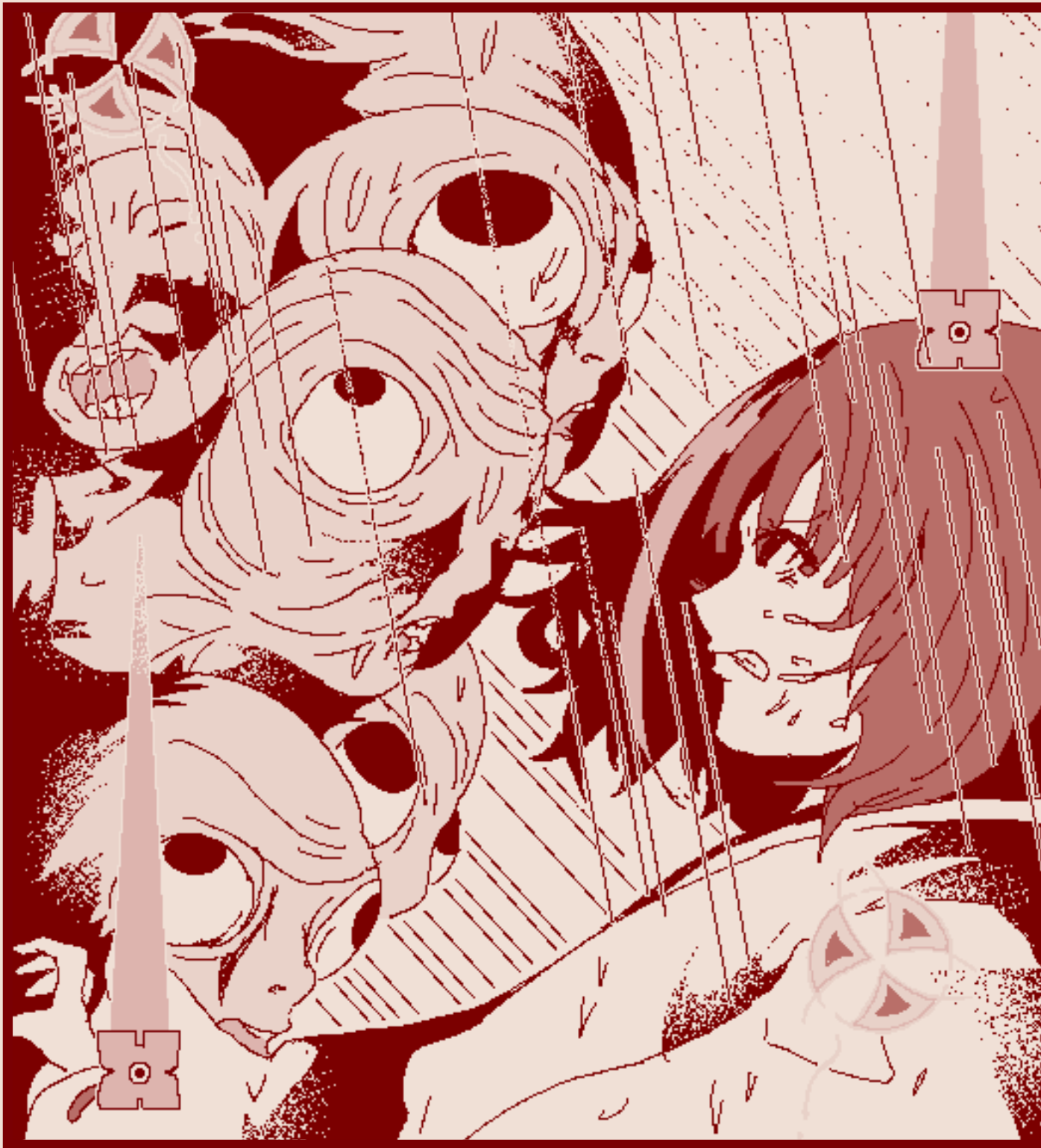
刃の軌跡から放たれるのは光ではなく、呪いの記録と黒い血の斬撃だ。

空間を切り裂いて迫る漆黒の斬撃を、アマテラスモンは流線型の蒼い籠手を交差させて捌く。神聖な装甲と不浄な泥の刃が激突し、火花ではなく、浄化の光と腐水の飛沫が烈しく飛び散った。

「るああああああああああ!!」

アマテラスモンの腰に連なった翠色の勾玉が空中に浮遊し、一つ一つが太陽の炎を纏った流星となって老いた赤子へ降り注ぐ。

着弾の熱量が、老いた赤子の青白い皮膚を焦がし、脂の爆ぜる悪臭が辺りに充満する。だが、老いた赤子は痛覚を完全に欠如させているのか、肉が焼け焦げることすら意に介さず、遺跡の巨大な石柱を足場にして再び跳躍し、アマテラスモンの頭上から胎盤の剣を力任せに振り下ろした。



アマテラスモンは逃げず、その一撃を両腕の手甲を重ね合わせて正面から受け止めた。

全天を圧するほどの圧倒的な轟音が鳴り響き、鏑迫り合いの姿勢で二体の巨軀が完全に拮抗する。

空中で押し合う形となったその瞬間、アマテラスモンの肩に乗っていた小都華の眼前に、老いた赤子の巨大な顔面が急接近した。

塩水でふやけた老人のような皮膚。濁った眼球。そして、むせ返るような腐った海藻と死臭。

だが、小都華の胃の腑を最も強くせり上げさせたのは、老いた赤子の首から肩、胸にかけて隆起した肉の装甲の隙間だった。

たるんだ皮膚の襞の下に、無数の小さな顔がびっしりと埋め込まれ、浮かんでは沈んでいたのだ。それは、蔭洲升に飲み込まれ、個としての輪郭を失った「墮子」たちの顔だった。

無数の顔が、一斉に口を歪め、空気が漏れるような呪詛の呻きを上げた。

『産ンデクレ……』

『生キタイ……』

『ウチ等モ、数ニ入レテクレ……』

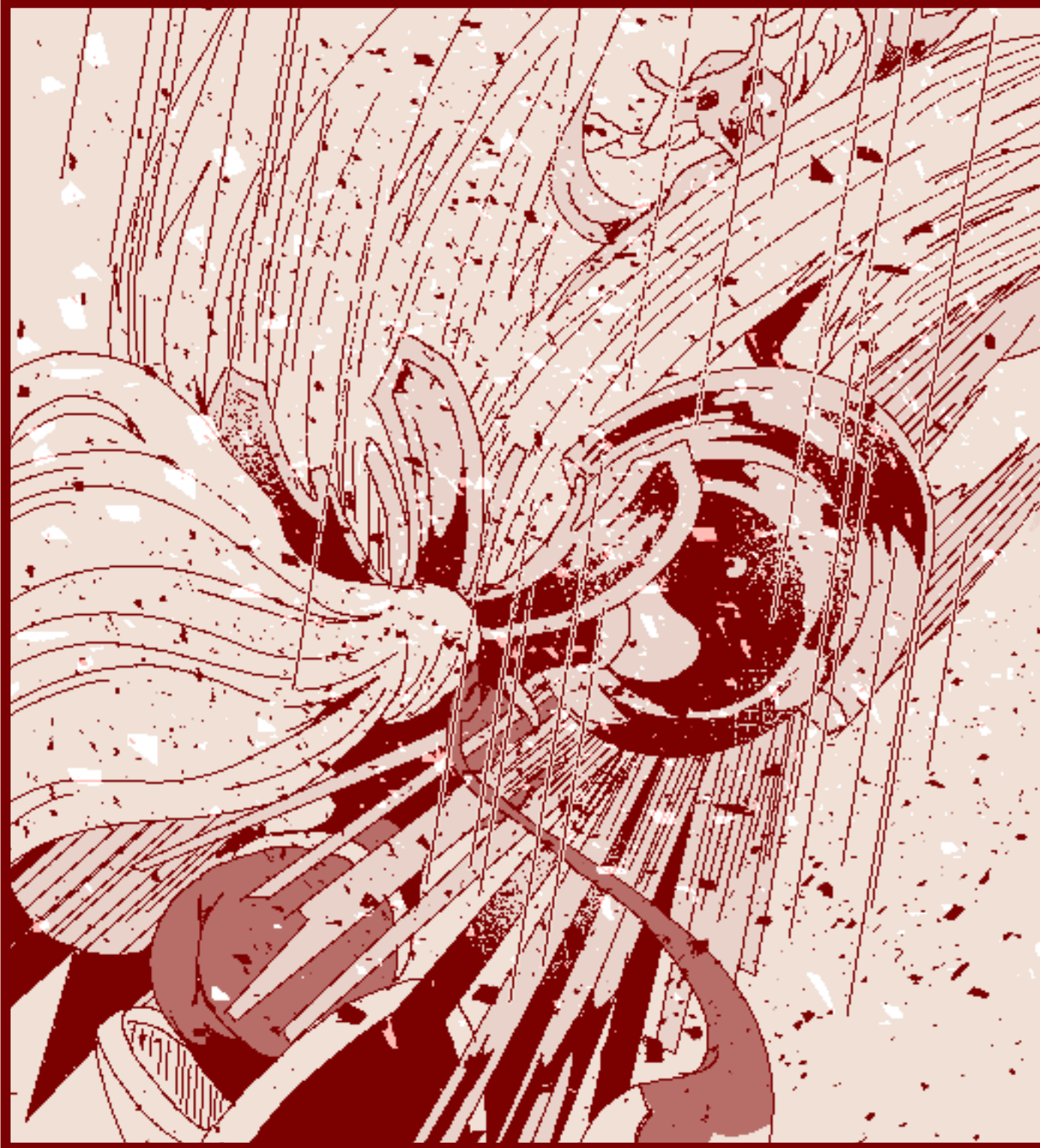
『現世ニ、……』

その言葉を聞いた小都華の背筋に、氷を滑らせたような悪寒が走った。

彼らを選ばれし乙女の四肢を開かせ、自らの汚物を注ぎ込もうとしていたのは、単なる獣の肉欲や繁殖本能などではない。

孕ませた子宮に自らの欠損した情報を乗せ、人間の胎児という現世への戸口を物理的にこじ開け、自分たちが生きた人間としてもう一度この世に這い出るためなのだ。

死者が生者の身体を資材として使い、命を奪ってでも自分たちの理不尽な生を取り戻そうとする、底無しの利己的な執念。それが、蔭洲升の呪われた儀式の真実だった。



あまりにも生々しく、そしてどこまでも身勝手な死者たちの怨念に、直情的な小都華の思考が、ほんの一瞬だけ空白に染まった。
(コイツら、人間の腹を…自分らの出口にするためだけに…!)

その動揺が生んだコンマ数秒の霊的な隙を、老いた赤子は見逃さなかった。

『ケエエエッ!!』

鏑迫り合いの拮抗を強引に崩し、老いた赤子が異常な筋力で胎盤の剣をねじり込み、そのまま横薙ぎに振り払った。

「しまっ……! 弾け、アマテラスモン!!」

小都華が悲鳴のように叫ぶ。

アマテラスモンは右腕の蒼い箒手で瞬時にカウンターの姿勢を取ったが、小都華の動揺によって同期の密度がわずかに落ちていた。

死者の呪いを何百人分も圧縮した黒い泥の質量が、アマテラスモンの防御の芯を無慈悲に叩き潰す。

巨大な鐘を殴りつけたような鈍い衝撃音が響き、アマテラスモンの五十メートルを超える巨躯が、空中で体勢を崩した。

そのまま彼女の身体は、防ぐ術もなく後方へと吹き飛ばされる。海面に突き出ていた非ユークリッド幾何学的な遺跡の石柱を何本もなぎ倒し、背中から凄まじい水柱を上げて陀金の海へと墜落していった。



海面へ叩きつけられた衝撃が、まだ世界に重く残響していた。

だが、陀金の海に沈みゆくかと思われた老いた赤子は、異様な執念で泥水を蹴り立て、再び海上にその巨軀を浮かび上がらせた。

『アアアア……ガアアアアッ!!』

潰れた喉笛から絞り出されるような絶叫と共に、右腕に巻き付いた巨大な胎盤の剣が、悍ましい変容を始める。

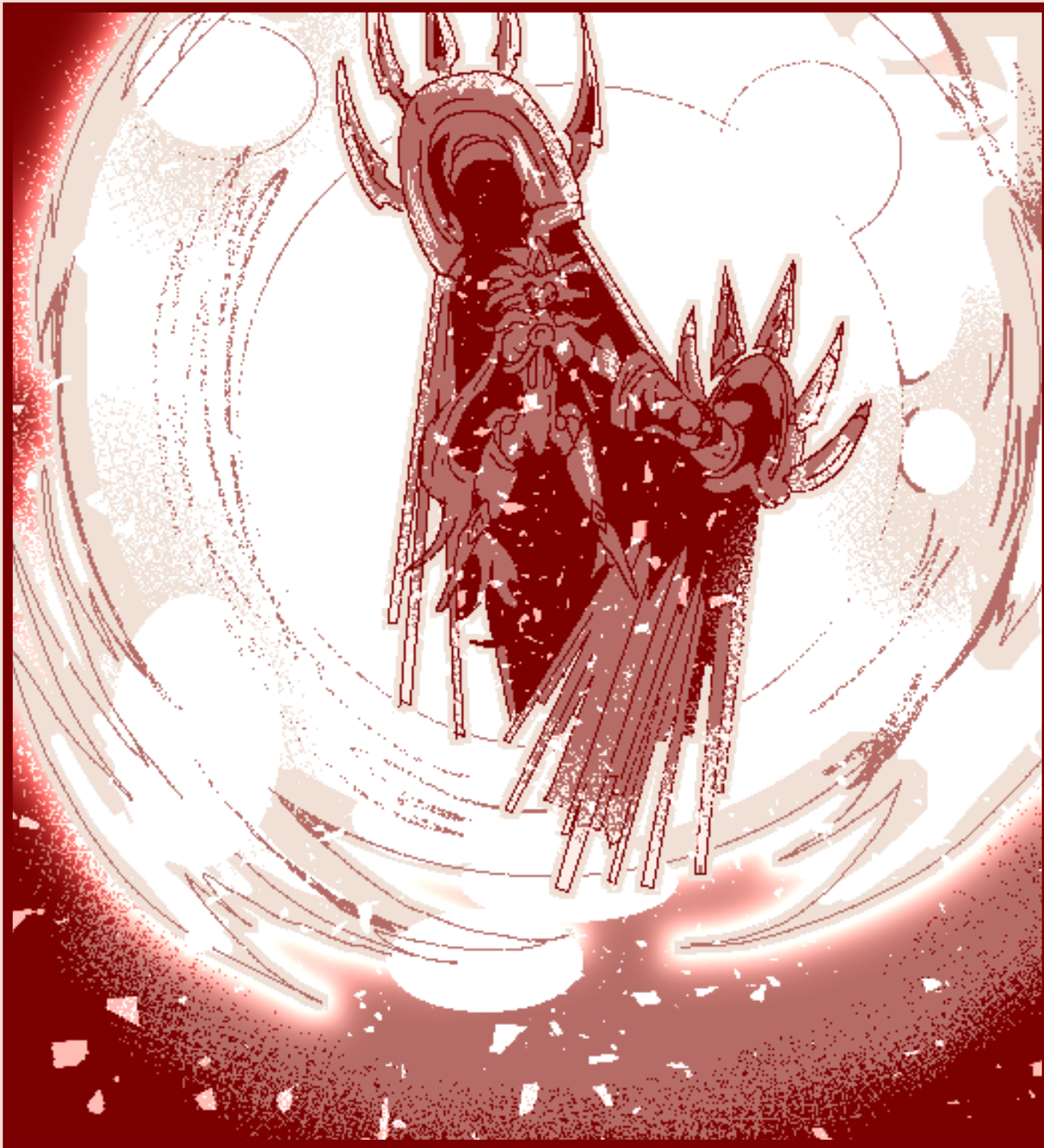
べちゃり、べちゃり、と肉が裂け、裏返る音が響く。剣を形成していたどす黒い膜と血管の束が解け、八つの巨大な海蛇の首、あるいは醜悪な肉の砲塔のような形状へと枝分かれしていった。

「スサノオモンの伝承に語られる神器ゼロアームズ：オロチ…!」

—それを、腐敗した臓物と死者の未練だけで強引に模造した、穢れた兵器の完成形態。

八つの肉の砲口の奥で、紫黒いエネルギーがバチバチと火花を散らしながら収束していく。それは自然界の雷ではない。デジタルワールドの深層から引き摺り出した欠損ログと、かつて海に消えた者たちの怨嗟を極限まで圧縮した、呪いの雷光八雷神の模倣だった。

チャージが進むにつれ、周囲の空間が四角いブロック状のノイズに侵食され、削り取られていく。生臭いオゾン臭と、肉が焼け焦げる匂いが入り混じり、小都華たちの肺を直接犯そうと迫り上がってきた。



「なんあれ…空間ごと削り取ってきてる…。」

「今更、ビビってもしゃあない!腹くるで遥さん!アマテラスモン!!!」

アマテラスモンの肩の上で、小都華が強風に煽られながら叫ぶ。

だが、その声に絶望はなかった。隣に立つ遥の青い瞳にも、かつての虚無の翳りは微塵もない。生への確かな渴望が、二人の繋いだ手を通してアマテラスモンのデジコアへと莫大な熱量となって流れ込んでいた。

『—————』

アマテラスモンは空の彼方へふわりと浮かび上がると、静かに右腕を引き、巨大な拳を腰溜めに構えた。

彼女の全身を包んでいた太陽のフレアが、急速に右の拳の一点へと収束していく。

光が圧縮されるにつれ、周囲の空気が陽炎のように歪み、高熱によって海水が瞬時に蒸発して白い壁を作る。

神聖なる弓矢でも、天の剣でもない。小都華の「物理と怒りで理不尽をぶち破る」という強烈な意思と、遥の「まだ生きたい」という祈りが結合した結果、アマテラスモンが導き出した答えは、一切の小細工を捨てた純粋な光の『拳』だった。

天地の六方—上下四方—のすべての闇を照らし出し、理不尽なるものを物理的に粉碎する極大のエネルギー。

右の拳に集約された六合照徹閃が、まるで超新星の如き輝きを放ち、翳ることのない太陽がそこに生み出された。



『エエエエエッ!!!!!!』

老いた赤子の八つの肉の砲口から、世界を黒く塗り潰すような呪いの雷撃八雷神が一斉に放たれた。空間を削り取りながら迫る紫黒い稲妻の束が、天を覆い尽くす。

対するアマテラスモンは、ただ静かに、そして圧倒的な暴力性を秘め、右の拳を真っ直ぐに突き出した。

「消し飛ばえええええッ!!」

小都華と遥の絶叫が重なる。

六合照徹閃の光の拳と、八雷神の呪いの雷撃が、陀金の海の上空で正面から激突した。

音すらなかった。人間の鼓膜の限界を遥かに超えた衝撃波が、少し遅れて遅れて世界を叩き割る。

一瞬、拮抗するかのように見えた黒と黄金のエネルギーだったが、生者の執念を物理的な質量へと変換した太陽の拳が、死者の怨念をあっけなく蹂躪した。

紫黒い稲妻がガラス細工のように碎け散り、光の拳が老いた赤子の右腕偽りのオロチを、肉の層ごと根元から粉碎する。

「ギェェアァアァアッ!？」

骨が碎け、肉が蒸発する悍ましい音が響く。防御の要を失った老いた赤子の巨軀に、アマテラスモンの拳が深々と突き刺さり、その背中側へと黄金の光が貫通した。

大爆発。海面が数千トン規模で巻き上がり、蒸発した海水のが雲となり蔭洲升の空を覆い尽くした。



圧倒的な光と熱の余波が引いていく。

老いた赤子の巨軀は、腹部に巨大な風穴を開けられたまま、黒い海へと無様に吹き飛ばされていた。

アマテラスモンは追撃を行わず、ゆっくりと振り向き、崩れゆく敵に背を向けた。

それは武の残心であると同時に、これ以上、死者の残骸に生者の時間を割く価値はないという絶対的な拒絶の意思表示でもあった。

背を向けられた直後。

老いた赤子の腹部に穿たれた穴から、内部に残留していた六合照徹閃のエネルギーが一気に膨張した。

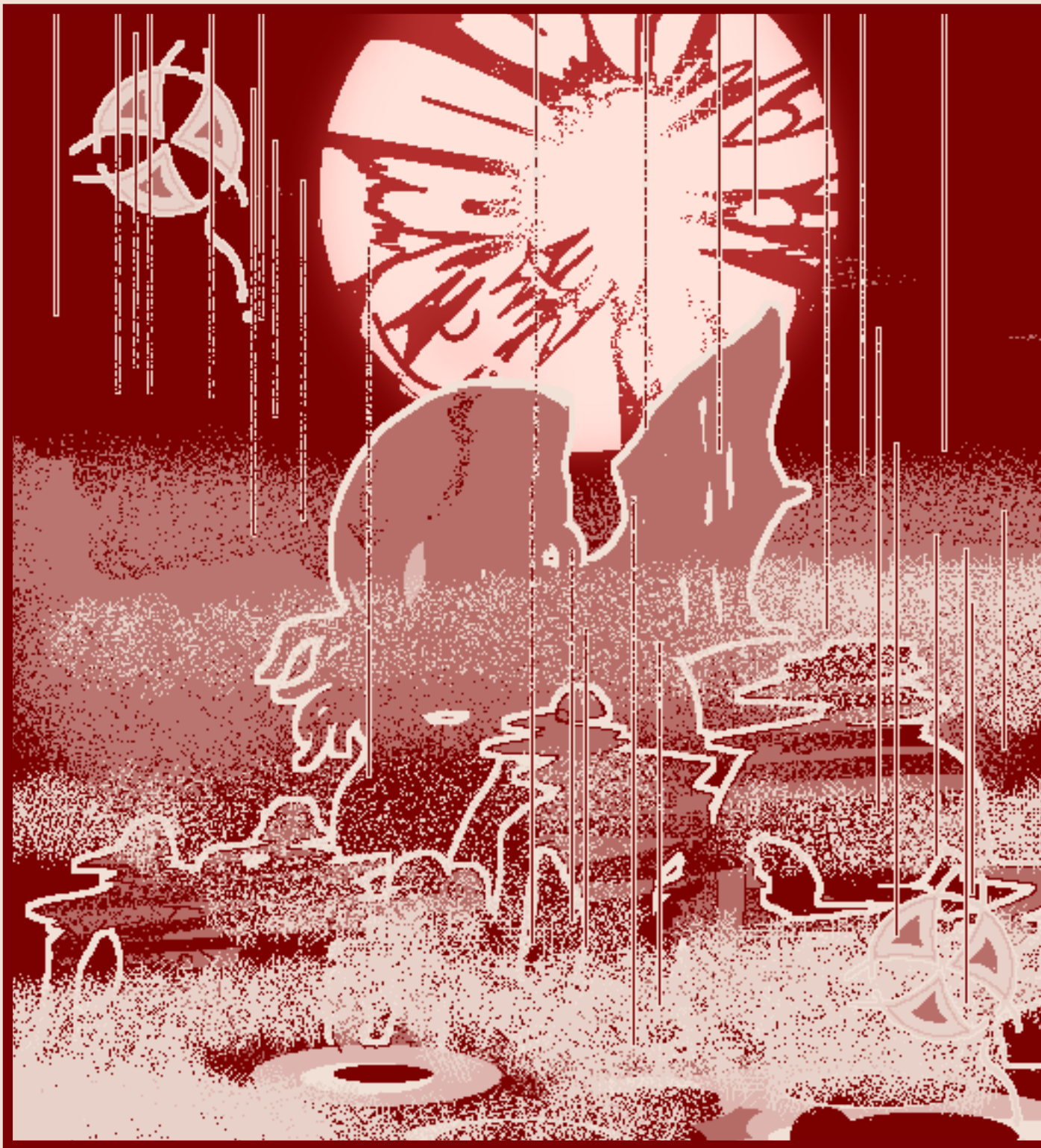
天と海を繋ぐような巨大な光の柱が立ち昇り、老いた赤子の肉体を内側から完全に飲み込む。

泥も、血も、泡も残さなかった。神の名を騙り、他者の悲しみをすり減らして組み上げられた邪悪な装置は、データの一片すら残すことなく完全に浄化され、消滅した。「…終わった」

対岸の黒い砂浜で、月彦が大きく息を吐き出した。

「ふふ…本当に、規格外の義妹を持ってしまったものだねえ。」

伽夜子が扇子で口元を覆いながらも、その目には隠しきれない安堵と喜びの光が浮かんでいた。



儀式核が消滅したことで、蔭洲升という空間そのものを維持していた楔が抜け落ちた。遠くで鳴り続けていた咆哮のようなサイレンの音がバグったように途切れ始め、やがて不快なモデムノイズを残して完全に停止した。

町を形作っていた古い舟屋、郷土資料館、そして儀式場の木造建築が、四角いドットの欠落に還元され、霧と共にパラパラと崩れ落ちていく。

路地を這い回っていた堕子たちの輪郭もまた、泥水が干上がるように、音もなく砂へと還っていった。

だが。

空間が崩壊していく中、沖合の暗い海面下……霧の向こう側に、沈みゆく巨大な影がゆらりと姿を現した。

それは老いた赤子のような継ぎ接ぎの怪物ではない。太古からそこに存在し、ただ冷徹に事象を見つめ続けてきた、名状しがたい深淵の神格ダゴモンを思わせる、シルエットだった。

そして、崩れゆく堕子たちの中に紛れていた、堕子とは明らかに異質な、ぬらぬらとした鱗と水掻きを持つ影のような者どもが、その巨大な影の呼び声に応えるように、次々と海の中へと身を躍らせて帰っていく。

それは、月彦たちに向けられた静かな示唆だった。

彼らが打ち破ったのは、あくまで神の理屈を借りて略奪を行っていた人間の情念に過ぎない。

それを仕向けたこの海の底には、人間の論理など及ばない、本物の深淵がまだ静かに息づいているという、冷ややかな余韻があった。



息苦しい。
空間崩壊の凄まじい渦に巻き込まれた遥は、気がつけば、光の届かない冷たい水の中に沈んでいた。
肺の酸素が限界を迎え、口から銀色の泡がこぼれ出る。彼女にとって海は、両親の命を奪った絶対的な恐怖と喪失の象徴だ。パニックに陥り、手足をばたつかせてもがく。
その時、海底の暗闇から、消え残っていた堕子の黒い触手が数本、泥のように伸びてきて、遥の足首をきつく巻き取った。
(…!)

深淵へ引きずり込まれそうになった刹那、遥の横を弾丸のような速度で青い影が通り抜けた。
シードラモンが鋭い牙で遥の足に絡みついた触手を容赦なく食いちぎり、海水の濁りごとそれを掻き消した。
そして、もがき苦しむ遥の背中に、ふわりと、二つの温かい感触が触れた。
それは、優しく、確かに彼女を愛してくれていた生きた温度を持った手のひらだった。
『—遥』
背中を、優しく水面へと押し上げてくれる力。
死者は生者を底へは引きずり込まない。海へ還れと命じるのは、いつだって神の名を騙る貪欲なシステムだけだ。本当の愛は、ただ生者の未来へと背中を押した。
海中から勢いよく浮上し、水面から顔を出した遥の網膜を、暴力的で、けれどひどく懐かしい真夏の太陽の光が射抜いた。
遠くに王港町の波止場が見える。
小都華が必死に手を伸ばしている。月彦、伽夜子、クダモン、コヅキガルルモン、ブシアグモン。
…そして横では小さな緑色の姿に戻ったベタモンが、笑ってこちらを見ていた。
もう、自罰の底に沈む理由はない。
遥は、涙とを海水に溶かし顔に年相応の笑みを浮かべ、眩しい生者の世界へ向かって、自らの意志で、ゆっくりとその手を伸ばした。



「ぶはぁ！」

水面を突き破り、遥は勢いよく顔を出した。

大きく息を吸い込むと、肺の奥まで一気に空気が流れ込んでくる。むせ返るような腐海と鉄錆の臭いではない。それは、むっとするような潮の香りと、アスファルトを焦がす熱気、そして青葉の匂いが混ざり合った、生きた真夏の空気だった。

網膜を焼灼するような、暴力的で、ひどく懐かしい太陽の光が遥の視界を白く染め上げた。

耳鳴りのような蝉時雨が、頭上から降り注いでいる。遠くではカモメが甲高い声で鳴き、防波堤に当たる波がリズムカルな音を立てて砕けていた。

王港町の波止場が見える。

「遥さぁんっ！」

水しぶきを上げて、小都華が必死の形相で泳ぎ寄ってくる。巫女服はすっかり水を吸って重くなっているはずなのに、彼女の動きには微塵の躊躇いもなかった。

「小都、ちゃん…！」

小都華が遥の身体にすがりつくようにして、その細い背中に腕を回した。

冷たい海水が跳ねるが、二人の身体の間には挟まれた確かな体温が、お互いが生きているという何よりの証拠として脈打っていた。

「アホ！ ほんまにアホ！ 心臓止まるかと思たわ！」

泣き笑いのような小都華の怒鳴り声が耳元で響く。その騒がしさが、今の遥にはどれだけ心地よかったか。

「…うん。ごめん…でも、帰ってきたよ、小都ちゃん」

遥は涙と海水でぐしゃぐしゃになった顔をほころばせ、小都華の首筋に顔を埋めて、その身体を強く抱きしめ返した。

泥のような死の匂いは、もう彼女たちにはまとわりついていない。生きている人間の、汗と熱の匂いだけがそこにあった。

「やれやれ…怪我はないかい！」

頭上から声が降り注ぎ、二人が見上げると、オメガモン・天叢雲の巨大な肩の上に立つ伽夜子と月彦の姿があった。

超究極体の神々しい武威を纏ったオメガモンは、すでにその役目を終えたように静かな佇まいを見せている。

「…よかった…無事みたいです。」

月彦が、安堵の息を吐いた。その声には、修羅のような怒りはすっかり鳴りを潜め、いつもの弱気で、けれどひどく優しい響きが戻っていた。

「ふふ…さて。それじゃあ、私たちも若いエキスを分けてもらいに行こうじゃないか。」

伽夜子が、扇子で口元を覆いながら妖しく微笑んだ。

「へ？ 伽夜子さ—うわぁあっ!？」

不意打ち。伽夜子は月彦の襟首をガシッと掴むと、そのまま躊躇なくオメガモンの肩からの海へ向かって飛び降りた。

盛大な水柱が上がり、月彦の情けない悲鳴が蝉時雨の中に吸い込まれる。

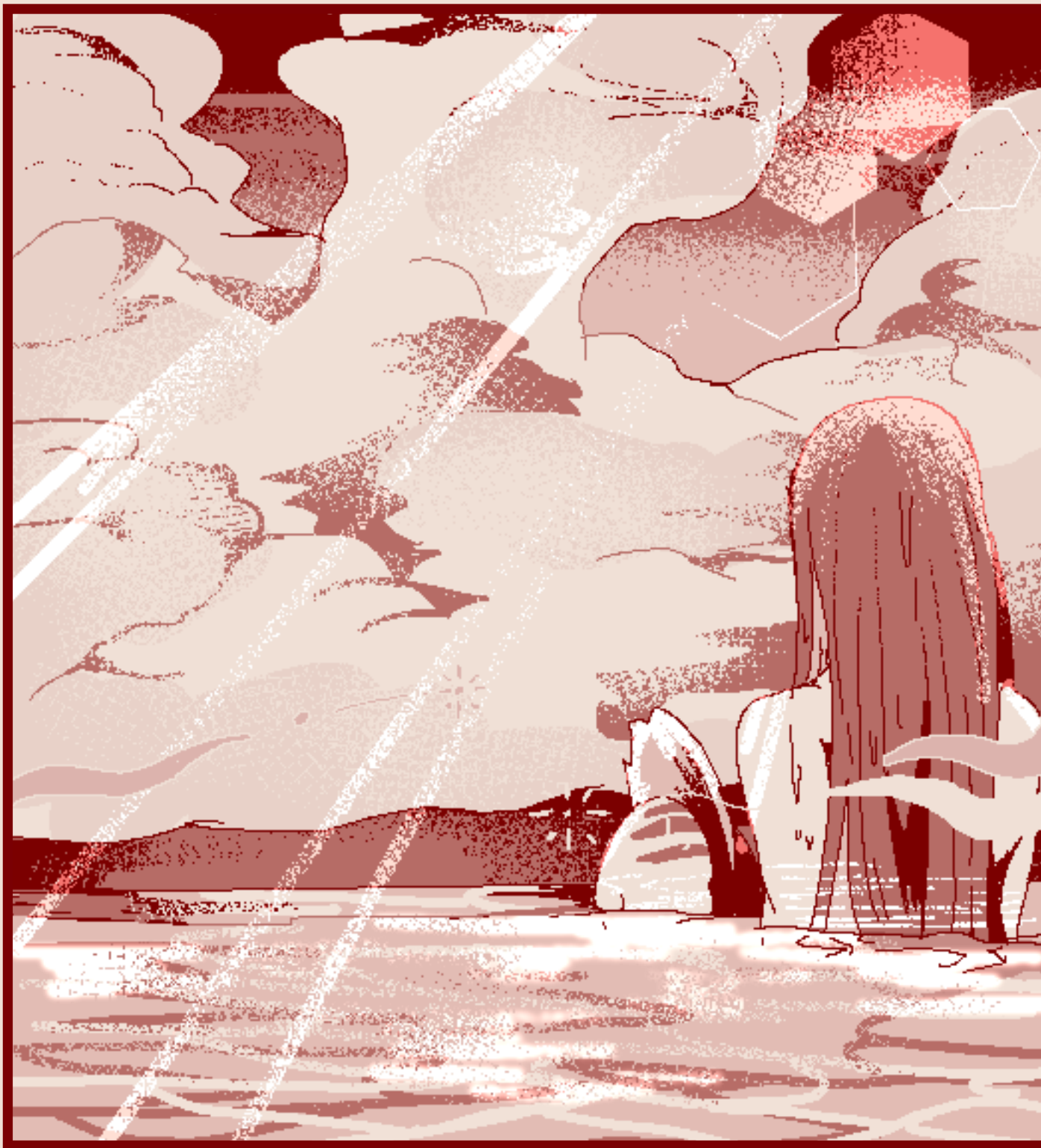
「ちょっ、伽夜子さん！ 何するんですか！ 服が、それにデジヴァイスが濡れ…！」

「細かいことを気にするんじゃないよ。ほら、小都ちゃんたちに笑われているじゃないか。」

ずぶ濡れになって海面から顔を出し、むせ返る月彦の頭を、伽夜子が楽しげに撫で回す。

そのあまりにも日常的な、そして馬鹿馬鹿しいやり取りに、小都華が堪えきれずに吹き出し、遥もまた、お腹を抱えて声を出して笑った。

それは、蔭洲升の死んだ海では決して響くことのなかった、生者たちによる純粹な喜劇の音だった。



笑い声が少し落ち着いた後、遥はふと、自分を見つめる視線に気がついた。

水面を器用に犬掻きのように泳ぎながら、緑色の小さなデジモン…ベタモンが、大きな瞳でじっと遥を見上げていた。

背鰭にあった黒い傷は、オメガモン・天叢雲の光の余波を受けたためか、すでに塞がりかけている。

「…ベタモン。」

遥は手を伸ばし、濡れたベタモンの身体をそっと抱き寄せた。

両生類特有のひんやりとした肌触り。けれど、その奥からは確かな生命の鼓動がトクトクと伝わってくる。

「へへ…なんだよ。俺のケツでも触りてえのか？」

憎まれ口を叩くベタモンに、遥は「アホ」と小さく毒づきながら、その頭に自分の額をすり合わせた。

「…ありがとうな。ウチの手、引いてくれて」

それは、過去に失った相棒の代わりに対する言葉ではない。

今、この瞬間に自分の隣にいて、共に痛みを分け合い、泥だらけになって生きる道を選んでくれた今のパートナーに対する、心からの言葉だった。

「…けっ。俺はお前と一緒にいてえって、言っただけだ。」

ベタモンは照れ隠しのように顔を背けたが、その緑色の瞳の奥には、確かな信頼の光が宿っていた。

遥はゆっくりと顔を上げ、もう一度、王港町の海を見渡した。

太陽の光を乱反射し、無数の宝石を散りばめたようにきらきらと輝く水面。

両親の命を奪い、長年自分を苛んできた海への恐怖が、これで完全に消え去ったわけではない。夜になれば、またあの黒い波の幻影に怯える日もあるだろう。喪失の傷跡が塞がることは、きっと一生ない。

けれど、今はもう、それに自分を明け渡すつもりはなかった。

自分は一人ではない。小都華がいて、月彦や伽夜子がいて、そして腕の中には温かい相棒がいる。

「…綺麗、やね」

遥の口から、自然と言葉がこぼれ落ちた。

海を憎むだけでなく、その美しさを認めること。それは、悲しみを抱えたまま、それでも生者の世界で呼吸を続けていくという、彼女なりの小さな、しかし宣言だった。

吹き抜ける潮風が、少女たちの濡れた髪を優しく揺らす。

生きた夏の匂いが、いつまでも海を包み込んでいた。